

# 「宗教的情操」の教育に関する一考察(2)

## —天理高校の宗教教育の事例から—

A Study on Education of Religious Sentiment II

—Case of the Religious Education at the TENRI high School—

小幡 啓靖

Hiroyasu Obata

Tenri high School was established to educate the students from the Tenri-kyo believers' family. The education based on the philosophy of Tenri-kyo has been done there. Even though as the background of teaching there is the particular unique God (Tenrioh-no-mikoto=Oyagami) originated from the religion of Tenri-kyo, the education in that school seems to provide universal resource for ethical education in general.

In this paper I tried to review the principle of Tenri-kyo and from the point of teaching ethics, by students' impressions and evaluations toward entire school life. Thus I would like to extract possibility for ethical education.

1. はじめに
2. 天理教の人間観
  - (1) 天理高校と天理教
  - (2) 天理教の人間観
    - ①生かされる
    - ②心の成人を目指す「きりなしふしん」
    - ③日常生活と信仰
3. 天理高校の教育実践
  - (1) 宗教の時間
  - (2) 礼拝について
  - (3) 宗教の時間以外の学校生活について
4. 生徒の意識・評価
5. まとめ  
～「宗教的情操」の教育への示唆

### 1. はじめに

本稿は、天理高校における宗教教育の実践をもとに「宗教的情操」の教育について考察したものである。

「宗教的情操」の教育をめぐるには、様々な議論が展開されているが、実際の教育実践をもとに考察することは、これまで余りなされてこなかったように思われる。筆者は、金光教の教義をもとにした金光学園高校での

「宗教教育」の事例を紹介した経験を持つが、それが金光教独自の宗教観に根ざしたものであるが故に、倫理教育としての普遍性を持ち得ないか否かについては判断を留保しつつも、それが倫理教育の可能性を考察する上で、多大な示唆を与えるものであることを指摘した<sup>1)</sup>。

「宗教的情操」についての定義にしても、それと深く関わるとされる「生命に対する畏敬の念」の捉え方にしても、多岐に渡っており、そのことが議論の混乱を招いていると考えることもできる。哲学的、思想的な接近も重要な課題であると思われる。しかし、この課題に対する接近方法として、多くの宗教系私立学校における宗教教育の事例を取り上げることも有効であるとする。それは、教育実践やそこでの生徒の意識を捉えることで、ひとつの倫理教育の「教育方法」として、宗教教育がどんな価値観を形成するのに役立っているのかを知ることが出来るからである。この方法には、事例の蓄積が要請されることは言うまでもない。そこで本稿では、第2の事例として、天理教の人間観、「天理高校」の宗教教育の事例、そして生徒の意識をもとに、いかなる倫理教育への示唆が得られるのかについて考察する。

## 2. 天理教の人間観

### (1) 天理高校と天理教

「学校案内」<sup>2)</sup>によれば、天理高校の前身は明治33年に設立された天理教校で、その創設は「道の上の子供仕込む所、通常一つの理を持って居た分にやならん」との御神言にもとづき、「親から子への信仰の伝承を目的」としたものであった。その後は、明治41年の中学校令に基づき天理中学となり、昭和18年には、すでに設立されていた夜間制の天理中学校を合併、さらに天理第二中学校も合併した。一方、大正9年に設立された天理女学校は、大正12年には天理高等女学校、昭和19年には天理夜間女学校を統合していた。昭和23年、学制改革によって両者が合併して生まれたのが、天理高等学校で、男女共学で昼夜両課程の高等学校である。

学校案内には「学校設立の精神と目的は天理教創設以来一貫して変わらず、天理教の信仰信念を身につけた有為の人材の育成を主旨としている」と記されているが、そのことは、そこに記された「おやさ」と(天理教では、天理教教会本部一帯をこう呼ぶ)で学ぶ「意義と心構え」の項に明示されている。そこでは「おやさ」は「全人類創造の親である親神天理王命がお鎮まりになる“ちば”があり、全教信者が親と慕い仰ぐ教祖中山みき様が“存命の理”を持って住まわれているところ」であること、「“ちば”は全ての人間にとっての生れ故郷」でありそこに住むことは「信者にとって最高のしあわせ」であること、従って「この“おやさ”に学ぶことは、全教信者子弟のあこがれであり、“おや”のひざ元で育てられることは人間の成人についてはかりしれない意義があることが記されている。そして「身近に“おや”のお心に触れ、素直に教理を実践することによって、その暖かく、あざやかなご守護の理を身に味わい、将来に育つための種・肥を伏せ込むよろこびを体得して、互いに助け合う“陽気ぐらし”の理想実現に向かう信念を身につけて、巣立つことが出来る」と意義づけられ、「そのためにはいたずらに親心に甘えることなく、自らの努力精進によって、心通りの守護を、まいたる種はみな生えと、成ってくる理を喜べるように、素直にして真剣な求道と伏せ込みの生活態度が望まれる」こと、それでこそ、「“ちば”の理を戴いて“おやさ”に学ぶ意義が明らかになる」と説明されている。

天理高校では、入学時に4つのコースを設けている。Ⅰ類は一般教科の他に課外活動を重視するコース、Ⅱ類は学習能力の向上に主眼を置いたコース、Ⅲ類は体育に

特に優れた能力を持つ生徒を集めたコースで野球部や柔道部など全国大会で優秀な成績を修めている生徒の多くが属している。Ⅰ類は教養コースと用木コースとに分けられる。

この「用木コース」は、天理教と天理高校の教育実践との結びつきを象徴的に示すもので「設立の主旨を一段と推進し、卒業後は自ら進んで世界たすけの『ようぼく』として役立とうと志す者の育成を目的とした」コースである。このコース独自の活動は週2回7時限を行う「通年活動(平常活動)」と、「特に定めて行われる集中活動及び、日曜日等を利用しての実習活動」である「特別活動」の両者を含んでいる。ここでは、教祖の教えである「おふでさき」「おさしづ」や「教会史」「教規」、さらに「ておどり」「鳴物」「ひのきしん」「教話」「ねりあい」「少年会活動」などについて3年間で学ぶが、特に指導理念として次の各項目が教師の間で留意されている<sup>3)</sup>。それは「(1)おやさとへ伏せ込む a) ちばの理解と伏せ込みの意義 b) ひのきしんの意義」「(2)主体の人間の育成 a) 人間を創造された目的 b) 教祖ひながたの意義(苦勞を通して楽しみを味わう)(人様の為に工夫を楽しめる人間)(特性を伸ばし人様の為に役立てる)」「(3)打算的考えの排除 a) 神一条の精神 b) 誠真実の心の養成」「(4)生きがいを持たせる a) 道具衆としての自覚 b) 世界たすけ(よふぼく)の使命感 c) おたすけ(伝道)の喜びを味わう。」「(5)学年に応じた学習を考える 1年・実践、2年・工夫、3年・体得」などの各項目であり、その指導理念の第一には「用木コースを通して、将来教人登録を希望するものがあることを留意し、生徒の信仰への意欲的態度を導くよう活動内容の充実が心かける」ことが掲げられている。

それぞれのコースの特性が、表1に示したコース別の志望動機にも表れている。「用木コース」の生徒は「自分が天理教を信仰してきたこと」「天理教に基づく教育を受けられること」が志望の動機として大きな意味を持っていたこと、Ⅲ類に属する殆どの生徒の志望動機が「クラブ活動がさかん」なことだという特徴を見てとることができる。

あわせてⅢ類を除いては「家族が天理教の信者であること」が大きな意味を持っていることにも注目しておきたい。先に「学校案内」で見たとおり、まさに「道の上の子供仕込む所」なのである。したがって、生徒も教師も原則としてそれぞれの教会に属している。幼い頃から熱心に参拝などに取り組んできた生徒は、先の用木コースに限らず天理高校の全員が拝戴する「おさづけの里」(後述)を授かり、信仰の道を深めてゆく。また卒業生

の多くは一度の進学を希望するとしても、3割から4割が最終的には教会や教庁の各施設に従事したりしながら教会の後継者となってゆく。

ただ、クラブ活動が志望動機になって入学した生徒の中には、「わたしが天理高校に入学した動機は本校の吹奏楽部に憧れたからである。天理の教えを一度も聞いたことのなかった私自身や私の母は、受験の為に教会へ通い始めた。仏教の流れをくむ我家において母は必ずしも賛同し、別席を運んだわけではないし、現在も積極的に参拝に出かけているわけではない。私が天理高校を卒業すれば、私自身の進み方次第で、この教えと一切関わらない人生を歩むことになるかもしれない<sup>6)</sup>」という生徒もいる。しかしこの生徒も「最近では、卒業しても、積極的に参拝し、家の信仰を守りながらでも、親神様の教えを心において天理とつながりを持ち続けていこう、と思いはじめた。」という。

この他に、学校や生徒を取り巻く環境として、“おちば”としての独特の雰囲気と寮生活を挙げることができる。

天理市内には、教会の子弟を対象に厳格に教義等を学ぶ天理教校附属高校の存在や、修養科といわれる短期の研修期間中の人々が「ひのきしん」に励んでいる様子など、生徒が刺激を受ける機会が多い。ある生徒は作文に、「道でよく、ゴミ拾いをしている人や草ぬきをしている人、においがけをしている人を見かけます。これは天理以外ではなかなか見ることが出来ない光景だと思います。高校生だって学校の登下校中にゴミ拾いをしている人とか、朝、参拝の始まる前に神殿に来て回廊ふきをしている人とかたくさんいます。そういう姿を見ると、何だか心あたたまるとかするのです。(略)天理で人にぶつくと、『すみません』とか言ってくれる人が多いし、朝、知らない人とも挨拶が出来るし、そういうのがいっつも見られる天理は本当に素晴らしいことだと思います。」<sup>5)</sup>と記している。

またほぼ半数の生徒がかかわる寮生活では、天理教の青年会や婦人会から派遣されている幹事や指導員が起床から就寝まで生徒と生活をともにし、寮生の相談役となり「種々の問題を信仰の上から考えながら指導」<sup>6)</sup>することが目指され、各寮で「毎朝晩のおふでさき拝読、おつとめ、おてふり等を通しておみちの教えを学び、立派な用木になる」<sup>7)</sup>ことや「おみちの女子高校生としての自覚と誇りを持って生活し、将来はみちの台としてまたおみちの心を持って社会に尽くすことの出来る基礎を養うよう努力する」<sup>8)</sup>ことが目標とされている。

以上、天理高校と天理教とが極めて密接な関係にある

ことを確認した。

## (2)天理教の人間観

### ①生かされる

次に天理教の人間観について概観する。ただ、その重層的な構造を十分に説明することは容易ではない。そこで、天理高校の教育実践を見る上で、特に関連が深いと思われる事項について中島秀夫による『総説天理教』<sup>9)</sup>をもとに考察する。

その第一は、人間の「親」としての神とその下で「生かされている人間」という人間観である。

そもそも天理教の神は、「元の神」「実の神」という表現にも見られるように、「人間創造の神」であるとされる。宗教学的には、「唯一神であり、絶対超越の神」(p.93)であるとも言われる。それは「おふでさき」の「こゝまでしんじんしたけれど もとのかみとハしらなんだ」「このたびあはれた じつのかみにはさうゐない」「このよふのにんけんはじめもとの神 たれもしりたるものハあるまい」などの表現に示されている。その上でその守護は、「包越の神」という教理論にも見られるように「人間の生命はじめ、全てのものの上に現されている」「包括的で完全な守護」であると言われる。そして、それは『稿本天理教教祖伝逸話篇』で、様々な神信心を巡った末に教祖のところを尋ねた女性が「あんたあっちこちとえらい遠廻りしておいでたんやなあ。おかしいなあ。ここへお出でたら、皆んなおいでになるのに。」との言葉を教祖よりかけられたという逸話によって示されている。

また天理教の神には、「月日」を「をや」(親)という言葉も用いられる。それは、「人間が一層具体的に、実感を伴いながら、親神の存在性を確認できるように」したものであるとされ、例えば「月日」という言葉には「昼夜を分かつたず、常に、どこにあって、全ての存在の上に恵みを与えられる親神」の存在が、「をや」(親)という言葉には「決して遥かかなたにあって、自ら固有なる絶対の立場から人間を見下ろし権威的に支配」している存在ではなく「人間のもとへ、どこまでも近く身を寄せられつつ守護し…ひたすらな親心から、人間の歩みを見守り、人間本来の生き方、理想の人生を実現し得るようにと心を砕かれる神」としての存在が示されていると捉えられる(pp.103-104)。

親神天理王命は、「全知全能の絶対超越性を持ったものではあるが、その一方で、限りなく広く暖かい慈愛の主体者とも考えられる」存在なのである。確かに「せかいぢうかみのたあにハみなわがこ 一れつハみなをやと

をもゑよ」「月日にハせかいぢうハみなわが子 かはいいゝばいこれが一ちよ」などはそのことを示していると考えられる。この「親神」としての働きの中に、中島は母性原理としての「是非善意にかかわらず、すべてを温かく包み込んでしまう、底のない無限の愛情」と父性原理としての「断固とした毅然さ」「善悪正邪、理非曲直などの筋目をきちんと立てる」ことの両面を合わせ持っていることを先の『逸話篇』などの内容に触れながら説明している。

人間は、この「慈愛の主体者」である親神との関係において、その身体を「親神によって貸し与えられた」もの、親神から身体を「借り受けたもの」とされる。これが、天理教の「かしもの・かりもの」の教理で、「もし、こうした人間存在に固有な構造を真に納得し得ないならば、その他あらゆる教理はただ空虚な知識としての意味しかもたなくなる」「従って借り受けた身体をいかに使うか、ということは、それ自体が信仰的生命的浮沈にかかわる問題であるといわなければならない」(pp.273-274)と言われ、「信仰行為を基礎づける根本の教え」とであるとされるほど重視されている教理である。

「にんけんハみなみな神のかしものや なんとをもふてつこているやら」「にんけんハみなみな神のかしものや 神のぢうよふこれをしらんか」などの教えに示されるこの教理に従う時、人間存在の目的も神によって規定される。それは「月日にわにんけんははじめかけたのわようふきゆさんがみたいゆへから」「せかいにハこのしんぢつをしらんから みなどこまでもいつむばかりで」という教えが示している。「もともと『陽気遊山』を楽しむべくこの世に生をうけているにも拘らず、その真実の原理を知らぬ故に、みな陰気にふさいだ生活している」人間を「陽気ぐらしの本来性に早く立ち返らそうというのが、この道の立教の本旨」<sup>10)</sup>であるとも説明されるように、親神による人間創造の目的は、「神人和楽する『陽気ぐらし』世界の実現」(p.309)だったとされる。『天理教教典』では、この「陽気ぐらし」を「助けの道にいそむ日々は、晴れやかな喜びに包まれ、湧き上る楽しさに満たされる。それは、常に、温かい親神の懐に抱かれ、人を助けてわが身助かる安らぎの中に身を置くからである。これが陽気ぐらしの境地である」と説明する。そこでは「閉ざされた心の窓を開き、遍(あまね)き、親神の光を身に受ける時、自らのくらい迷いの心は晴れて、明るい喜びの中に立つ」ことができるのであり、それは「楽しみづくめの生活(くらし)」と表現されている。

「かしもの・かりもの」の教理とそれに関わる人間存

在の目的である「陽気ぐらし」の教えは、「この世の人間は皆、元一つの親なる神によって創造(つく)られた神の子である。だから、お互いは『きょうだい』の間柄にあり、『たにん』などというものは一人もいない。このような人間がお互いに立てあい助け合ってくらす『陽気遊山』の世の姿を見て共に楽しみたい、との思いから、親神は人間世界を創(はじ)めた」<sup>11)</sup>という人間観や対人観につながる。それを象徴的に示すのが、「このよふをはじめて神のことならば せかい一れつみなわがこなり」「せかいぢういちれつわみなきよたいや たにんとゆうわさらないぞや」という教えであるが、「生かされる」という認識に基づいた教義が「天理教の愛他主義」として捉えられたり<sup>12)</sup>、「人間は一系列兄弟の平等な関係として把握されている点」を「人間観の先進性が著しい」と評価する<sup>13)</sup>研究者も多い。

なお、こうした神の意志を実感し、「神の力」を引き出すと言われるのが「つとめ」や「さづけ」である。

「さづけ」は、天理教の救済行為にかかわるもので、「神の恵みや守護の授けという意味」で「それが身を煩う苦悩の解決のために取り次がれる時に、神のあざやかな救いが現成すると教えている」と言われる。『おさづけ』の理を渡すとか、頂くなどというのは、他の人のために、神の恵みや守護を取り次ぐべき祈りの形式を教え、その資格を与えるということであり、また、それを頂くということの意味している<sup>14)</sup>のである。天理高校の生徒も、卒業時にこの「おさづけ」の理を拝戴する。

一方「つとめ」は、人間創造の元となる地点「ちば」を示す「かんろだい」を囲み、十人のつとめ人衆が、神楽面を付け「みかぐらうた」の地歌に合わせ、笛、ちゃんぼん、拍子木、太鼓、すり鉦、小鼓、こと、三味線、胡弓の九種の鳴り物の調べにのってつとめられる。これは「神による人間創造の守護を象徴的に表現したもの」だと説明されるが、中島は「私どもの信仰生活において、親神の意志、親神の守護の波動が生き生きと伝わってくるのが、『みかぐらうた』を奉唱する時であるし、それに合わせて手踊りを勤める時であるように思う。と言うのも、『みかぐらうた』を歌い、そして手踊りをする時に、私と親神の間の、いわゆる『我-汝』の関係が実感として確認できるような気がする」と述べている(p.165)。

## ②心の成人を目指す「きりなしふしん」

「元なる神」として親神のはたらきを捉え、その下で「かしもの・かりもの」としての身体を持つものとして人間を捉えることは、人間に対して性善説的とも言える

信頼感を導くことになる。これも、天理教の人間観の一つの特徴である。

人間に「陽気ぐらし」をさせようとする意志を持つとされる親神は、「一人一人の人間が精神的に成人してゆく姿を、楽しみに見守り導いている」<sup>15)</sup>と考えられている。そして「心の成人を遂げるためには、自分の古い小さな枠組みを一つ一つ打ち破って」ゆかねばならず、「どんなに長くこの道を通っている人でも、自分流の通り方、物の考え方だけを絶対化する時、成人は止まってしまうばかりか、退歩が始ま」<sup>16)</sup>る点に留意する事が求められている。

そこで天理教では「自らに生起するすべての事柄を、親神がたすけたいとの親心からこの自分に見せて下さる『天の与え』として喜び勇んで受けとめてゆく」<sup>17)</sup>姿勢を重視する。それは「たんのう」と呼ばれるが、「堪能」すなわち「十分満ちたりた思い」を表すように、敢えて『『なりたくない事柄』に遭遇し『思うことが思うようにならない』事態に出会って思案に余った時』にこそ、心の状態をそれを「たんのう」するように向けるというのである。「いささかも暗い影はなく、どこまでも明るく晴れやかな心の状態、しみじみと心の奥底から湧いてくる、尽きせぬ味のある静かな喜びとも言える」と指摘される<sup>18)</sup>ほどこの姿勢を徹底するのは、「日々いかなる事態に遭遇しようとも『たんのう』に心治めて進む道すがら」こそが「親神様の受け取り給うところであり、教祖の『ひながた』を辿ることでもある」と考えられているためである。

「いろいろのなりたくない事柄に遭遇したり、困難な場に身を置いたとき『背上看て』『はたを思うて』『あんな身ならと思うて』と低い心<sup>19)</sup>になって」「たんのう」したり、「過去の自分、道に引き寄せる以前の自分を思い返して、今この“みち”の信心に生きる自分はいかに恵まれているところだろう(略)、当面している思い悩みは、おのずから解消して行くであろう」と考えるなど、「たんのう」にはいくつかの意味があるが、何よりもこれが重視される背景には、この生活態度こそが「正に陽気ぐらしという『元のいんねん』に則した生活態度だから」とあるという考え方がある。「いんねんの理を深く悟り、何ごとも喜んで通ることによって、自らに内在する『元のいんねん』とのつながりが、知らぬ間に活性化してくる」といわれるように、「たんのう」は「よりよき将来を築くための積極的な心の治め方」とされているのである。

例えば、親神の愛情のもとで「生かされている」とされる人間には、「病はない」とされるのはその特徴をよ

く示している。「病むという現象はあっても一般にいう病そのものということではないむのであり、それは「神のすること」であって、かつ「神の人間救済に寄せる親心」の現れであるとされる(pp.286-287)。「どのよふな事でも神のする事や これをやまいとさらにをもうな」「このたびのなやみているをやまいやと をもっているのハこれハちがうで」「どのような事でも月日する事やいかな事でもやまいでわない」という教えは、それを示している。さらに、より積極的に「せかいぢうとこがあしきやいたみしよ 神のみちおせてびきしらすに」や「一れつこのどもハかわいばかりなり とこにへたてはさらになけれど しかときけ心ちがゑばせひがない そこでだんだんていりするのや」と言われるように、「てびき(手引き)」「ていれ(手入れ)」「みちをせ(道教せ)」などの言葉を用いて、何よりもまず「内面的な心の問題の解決の必要性」「心づかいをただし、生きる姿勢を整えて実行する事」が求められるのである。この他にも「病い」にかかわるおしえには「よふむき(用向き)」「せきこみ(急き込み)」などの言葉が含まれている。

天理教においては、病いとは、「にんけんによまいとゆうてないけれど このよはじまりしりたるものなし」「とのよふむつかしくなるやまいでも つとめ一ぢよてみなたすかるで」と示される通り、「救済のための、神からの啓示的サイン」であり、「人間はその解説を鍵にして、神から送られてくるサイン、ないしはシグナルを解説して、神の摂理に目覚めるべきもの」とあると考えられているのである(p.291)。

さらに「死」までも肯定的に受け止められることは、その姿勢が徹底していることを示している。天理教では、死は「出直し」と捉えられる。中島はこれを「死という現実存在の消滅をかけて、よりよき飛躍のために悪“いんねん”を納消するという意味をもつのではなからうか。そして、そのことは親神の人間救済に寄せ給う親心の秩序づけであって、よりよき新たな生を用意するべく、いったん無に帰せしめられたものと言うことができる。(略)すなわち人間は、いわば『陽気ぐらし』実現の可能的存在であって、すべての人間はその究極の理想が実現するまで、親神の守護を得て生まれかわり出かわりする」(p.314)と意義づけている。

『『出直し』とは、要するに古く狭い自分の枠組みを思い切って転換すること』であり、「いままでどんな心でいたるとも いちやのまにも心いれかゑ しんぢつに心すきやかいかゑば それも月日がすぐうけとる」と示されるように、「理にそって『心すきやか』に入れ替えることが、月日親神の思いにかなう」ことであると

も説明される<sup>20)</sup>。

そもそも、神の意志に背く人間の自己中心的なわがままな心づかいを、天理教では「ほこり」と呼び、教祖によって「をしい」「ほしい」「にくい」「かわいい」「うらみ」「はらだち」「よく」「こうまん」「の八種が示されている。例えば「かわいい」というほこりは「わが身さえよければ、他人はどうでもよい」と考えること<sup>21)</sup>と説明され、「わが身、わが子がかわすければ、人の身、人の子も同様にかわいがること」が求められている。

「いんねん」とは、この「ほこり」が「だんだんと心に積もり重なり容易には落ちにくいもの」になったものことである。「世界にもどんな“いんねん”もある。善き“いんねん”もあれば、悪い“いんねん”もある」「“いんねん”というは、前生ばかり、“いんねん”というやない。悪きばかりが、“いんねん”やない。この世でも十五才よりこのかた、してきたことは、よきも、あしきも、皆“いんねん”となる。又、前生よき事してあれば、“いんねん”として、この世で現れるか、次の世で現われるか、必ず現われんということはない。あしきこともその通りなれど、よき“いんねん”は皆一れつよろこぶ事故すぐと現わし、すぐとかやして下される」と言われる<sup>22)</sup>ように“いんねん”の内容は多岐にわたるが、そのうち、悪い“いんねん”は、“ほこり”と同様に取り払う必要があるとされているのである。

「一れつハみなめへめへのむねのうち ほこりいゝばいつもりあるから このほこりすきやかそふぢせん事に月日いかほどをもふたるとて」などの教えが示すように、親神には人間にその「ほこり」を取り除かせようとする意志があると考えられている。そして、日常生活において否定的に受け取られがちな局面を「ていれ」「てびき」「たんのう」「出直し」などの言葉を用いて、敢えて「肯定的」に受け止めることの根底には、それを親神の意志と反する心の用い方をする人間に対する「いましめ」とうけとめ、神の思いに応えようと「ほこり」や「いんねん」を払う契機にするという考え方がある。それらはすべて、誠真実の心が定まった「成人」への過程なのである。

こうした人間観を中島は「親神の守護の中で完成への道をたどる上昇する螺旋状の線として示すことが出来る」<sup>23)</sup>とまとめている。また、飯田照明は「人間は神が苦勞してやっつくりあげたものであるから、完成に向かう存在として捉えられており、死を出直しと考へて、さらに成人を目指すとも考へることも含めてオプティミズムと言われるかも知れないが暖かい教へであるとも考へている」という捉え方をしている<sup>24)</sup>。

この人間観が、直接教育にかかわった例として、昭和41年2月の真柱の「卒業豫定者に対するお話」を挙げておきたい。「教祖の年祭を勤めるといふことは、いわば教祖のお喜び頂くという言葉で常に申されることでありますが、そのことは、私たちは教理に添って、これだけ成人してまいりましたといふことを教祖に見て頂くその“ふし”である。(略)學業といふ年限を無事に通つたといふ諸君の喜びとを思い比べてみますときに、私は何となく似たようなものを感じるのである。……皆さん方はまじめに勉強して來たのであろう。しかし、卒業といふ日の今日になって、振り返ってごらん下さい。自分の思ふ存分な気持ちで勉強して來たであらうかどうか。ああもしたかつた、こうもしなければならなかつたといふ反省が、いくらかなりともよみがえつて來るのが、卒業式といふ日の節ではないか。(略)子供可愛い故に定命を早めたと仰言つたが如く、子供の成人を待ち兼ねるとお教へになつたところの親心と、それに應えて成人を續けて來たところの子供の現實と足取りとを思い比べてみます時に、私は年祭の年に卒業といふ事實を味わう皆さん方は、より深く自分を反省する時をお興へ頂いたものとも考へるのである」<sup>25)</sup>。

ここには、學業と「心の成人」の過程とを重ねてみる考へ方が示されている。

先に「螺旋状の線」として表現したようにこの「成人」への過程は「きりなしふしん」であるとされ、「もうこれでよいといふ所がない」のが特徴で「十分に成人していると思つてゐる人でも、まだまだ先がある」といふ考へが極められてゐるとされる。「ようようこゝまでつてきた じつのだすけハこれからや」といふ教へが「人間の成人の歩みを根氣よく導く親の気持ちを見事に表している」ともいわれる<sup>26)</sup>ように、この教へに従ふ時、現状維持よりも成長への意欲を常にかき立てられる要素をはらんでゐる。

### ③日常生活と信仰

既に、天理教における人間観を見る中で、病氣や死など生活に関わる事象との關係について触れてきたが、より日常生活との關わりが強いものとして、まず「ひのきしん」について見ておきたい。

「ひのきしん」とは、既に触れた「たんのう」や「つとめ」とともに天理教の信仰活動の象徴とも見なされる「神の守護に生かされてゐることの自覺に根ざした神恩奉謝の行為」である<sup>27)</sup>。『天理教教典』に、「ひのきしんは信仰に燃える喜びの現れで、その姿は、千種万態である。…欲を忘れて、信仰のままに、喜んで事に当たるな

らば、それは悉くひのきしんである。ひのきしんは、一時の行為ではなく、日常の絶えざる喜びの行為である。しかも、その喜びは、自分一人にとどまるのではなく、他の人々をも感化し、心あるものは、次々と相携えて、その喜びを共にするようになる」と記されているように、「ひのきしん」は、「いつでも、どこでも何の定めもなく各人が各様、心のまま日常生活の中で自由に行える行為」なのである。

例えば、食事の際に「言い知れぬ感謝と喜びの気持ちを食前と食後の拍手によって現す日常生活のささやかな行為も、ひのきしんの一つである」とされるし、「ひとことはなしハひのきしん にはひばかりをかけておく」という教えにもとづく「にほひかけ」という天理教の布教活動もまたひのきしんであるとされる。

先に生徒の作文を通じて紹介した天理市内の独特の雰囲気は、この考え方に導かれたものであると考えられる。「ゴミ拾い」や「草ぬき」、神殿の「回廊ふき」、それらは全て日常のこの「ひのきしん」の実践として行われているのである。

またこの「ひのきしん」に限らず天理教を信仰することと日常生活との関係においては、教祖の信仰の過程が「人間が本来の人生を実現してゆくための可能的規範、すなわち『ひながた』」とされていることもまた大きな意味を持っている。

これについては詳細に検討する必要がある<sup>28)</sup>し、また多くの研究もなされているが、中島はこの「ひながた」について、「教祖の生活史の中に、人間としての正しい生き方の理想態を見出し、それをあるべき人生の範例とし、それを見つめて信仰生活を進めるように」示されたもので、「したがって教祖の伝記のもつ意義は、単に教祖を偲び、その徳を讃えるものというより、むしろ信仰生活に根拠を与えるもの、教理への応答であるべき信仰生活の具体的基準、全き信仰生活実現の行為的指標として重視されている」という説明をしている(pp.173-174)。「ひながた」に示されている教祖像は「天理教の書物に描かれた中山みきは孝行、忠実などといった家族道徳の模範でもあり、貧困者の救済者でもある。寛容さと救しを持ってみきは人の感化、改心を図り、現在の表現を使えば、非暴力主義者の模範であったともいえるであろう。この教祖像は天理教の愛他主義の一つの原動力になるであろう」<sup>29)</sup>ともみなされる存在なのである。

「ひのきしん」や「ひながた」が日常生活と深く関わっており、具体的な行動の指針となることに触れた上で、最後にこうした日常の実践への動機づけについて考えてみたい。天理教の教義は相互に関連しており、諸々の要

素に分解することは困難であるし、ましてや動機づけについては、一つの信仰的行為を通じて得た喜びが、直接さらなる信仰に結びつくこともある。また、そもそも根本の動機づけは、神の願いでもある「一れつきょうだい」が全て兄弟姉妹であると感じ、たすけ合い共存する「陽気ぐらし」への意志であると考えられることもできる。そのことを踏まえた上で、しかしここでは敢えて「かんろだい」の存在について触れておきたい。

「かんろだい」は「人間宿しこみの元である“ぢば”にその証拠として据えられるもので、おつとめはそれをしんとして行われる」ものである。それは「このだいがでけたちしだいつとめする どんなことでもかなはんでなし」「このだいもいつどふせへとゆはんでな でけたちたならつとめするぞや」との教えにもあるように「かんろだいの建設こそ、おつとめ完修の第一歩」であるとの意義を持ったものなのである。

現在その「かんろだい」は木製で十三段の台が据えられている。明治14年には、石造りの「かんろだい」の建設に着手したにもかかわらず、明治15年に警官によって石造二段の未完成かんろだいが没収されたという経緯がある。そしてこのことを契機に「一れつすますかんろだい」から「一れつすましてかんろだい」とおつとめの言葉に変更が加えられた。『おふでさき』には次のように記されている。

「いまゝでハこのよはしめたにんけんの もとなるぢばわたれもしらんで このたびハこのしんちつをせかへちうゑ どふぞしいかりをしゑたいから それゆゑにかんろふたいをはじめたわ ほんもとなるのところがなるのや こんな事はじめかけるとゆうのまな せかいぢうをたすけたいから それをばななにもしらさるこ共になとりはらわれたるこのさねんわな しかときけこのさきなるハとのよふな かやしあるやらこれしれんでな」

中島はこのことについて「人間存在の歴史にとって極めて重大なる事件」とした上で、次のように解説する。「それ以後においてかんろだいの建設ということは、単に我々の信仰的期待の中で、単なる内面的な問題ないしは空想的事柄としてのみ存在するもの」ではなく、あくまでも「極めて現実的な問題」(pp.249-252)として考えられている。「すべての人間の心が入れ替わり成人を遂げて澄みきったものになった時にこそ、『かんろだい』もおのずから建設されるのであり、親神の思召にふさわしいつとめ人衆も完全に揃うのであり、かくしてそこに、『おつとめ』が成就されて、親神による究極の救済たる陽気暮し世界が実現されるものである」(p.259)という説明に見られるように、この「かんろだい」の建設は、

天理教を信仰する者にとっては「目に見える形」での目標であり、それが「未完成」であることは、「きりなしふしん」の考え方と合わせて自己の信仰生活をさらに充実させる必要を痛感させる動機づけとして働くものと思われるのである。

以上が、天理教の人間観についての「概括」である。十分に触れられなかった点、さらに綿密な検討が求められる点もあるが、本論においてはここにとどめたい。

歴史的には、「天理教の理想世界である『陽気暮し』の世界は、豊饒平和で病も難儀も不自由もない『この世の極楽』としてえがき出された。死を『出直し』と見る徹底した現世中心主義と『いちれつ』の人間平等主義の立場から、その教義で、封建宗教の根幹をなしていた祖霊崇拜も、身分制度や家父長的な縦の家族道徳も、原理的には意義を持たないとされた。『谷底』の救済を第一義とし、病気を神の道教え、手引きと見る病苦観、夫婦中心の家族観等の新しい教義をかかげる天理教は、すでに幕末維新期の民衆の『世直し』の願望を反映する新しい思想運動の性格を帯びていた。」と把握されている<sup>30</sup>こと、また中島は、「陽気ぐらしをさせたいという創造の意図を享けた存在という自覚をもち得る」上に「幾度もの出直しを経て、そのつど、着実に成人していく筋のなかにも、明確な希望の論理を見出すことができる」この人間観を「現代人の志向にこたえる明るい人生観」であると総括している（p.239）ことを付記しておく。

### 3. 天理高校の教育実践

「学校案内」においては「信条教育」について次のようにまとめている。

「本校は、教育方針にもとづいて、一般教科のほかに『教義』の教科を必修しています。全生徒が週2時間の『教義』の授業を履修する、その主な内容は、原典、教祖伝、教典、ておどり、ひのきしんなどです。▽『教義』の授業のほかに、本校の職員・生徒は全員毎朝本部神殿に参拝し、よき朝を迎えた事を感謝し、一日の生活を祈念する“おつとめ”をしています。また、本部の月次祭には全員が参拝するほか、学校行事として月次祭教話を聞かれています。▽“ひのきしん”には、多くの生徒が積極的に参加します。毎年、1月に行われる本部の『お節会』には、全校生徒がひのきしんに参加し、モチ焼きや接待に汗を流します。夏の“こどもおちばがえり”には千名近い生徒が夏休みを返上して参加し、各所で活躍しています。さらに、毎日曜日、“早朝ひのきしん”を実

施し、朝暗いうちから百名以上の生徒が、街路の清掃などを行っています。このひのきしんには、3年間欠かさず参加する生徒も多く見られます。」

ここでは、生徒の感想を交えながら特に「宗教」の時間、朝の参拝、日常の学校生活での特徴について紹介する。

#### (1) 宗教の時間

天理高校の「宗教」の時間は、「教義」の時間と呼ばれ6名の教師が「教義科」を組織して授業に当たる。高校1年時は『天理教教典』、2年時には教祖の筆による『おふでさき』、3年時で教祖70年祭の折にまとめられた『稿本天理教教祖傳』が教材として用いられている。

教義科のA教諭の協力を得て、2年生の『おふでさき』の授業と3年生の『教祖傳』の授業、及び高校1年生の『おてふり』の実習を参観した。いずれの授業も年間のカリキュラムに沿ってすすめられており、天理高校を特色づける主要教科として組織的かつ計画的に行われていることが印象づけられる授業であった。

授業は、天理教の参拝時の特色である4回の拍手によって開始され「おふでさきの3号を進んでいます、今日は55ページから」<sup>30</sup>という導入後、全体での音読、各語句や節の説明に移る。

「『にがり水』とは、教祖が目に見えない人の心を水に例えて示して下さったもので、それが早く澄むようにということを示している。」「『しんのはしら』には、二つの意味がある。一つは“かんろだい”のことを示す意味で、もう一つは人としての『真柱様』のことを示す意味である」ことなどを伝えながら、適宜アンダーラインを引く事なども指示される。このうち「かんろだい」についての解説では（教義上は既に前節で紹介した通りであるが）「“かんろだい”を立てること自体はた易いことであるが、人の心が濁ってはいかんろだいを立てるところが分からない。早く人の心が澄むように、心の掃除をしなければならないということ表現している。」という説明がなされていた。

また、その『おふでさき』が示された明治7年は、天理教に対する官憲の取り締まりが厳しくなった時期であり、信仰が遅れるという状況があったが故に、こうした教えが出されているという歴史的背景も紹介された。

ページが次に移る際にも、やはり全員での音読からはじめられる<sup>30</sup>。この後『おふでさき』り執筆当時流行していた「石門心学」との関係が取り上げられた。この石門心学は通俗道徳的、日常倫理的内容を抽出したものであるが、この点は次のように解説された。



『しんがく』というのは、当時心学道話と言われ、徳川時代の後期以降、町民農民層にかなり流行したもので、乱暴な言い方かもしれないが、一口で言うと道徳的な教話で、儒教や仏教、神道をよりどころとして教説を取り入れて道徳的な話の大系をつくって、庶民に説いたものである。実際はかなり浸透して影響もあった。「歌の意味は、古来から心学をはじめとして道徳的な教話や種々の古くからの言い伝え、人間生活の指針になるようなものはあるわけだが、どれも『この世の元はじまり』ということについてまで言及したものではないという意味である。教祖のおっしゃっているのは、どういう思召しで、どういうご守護で人間世界を始められたかということまで言ったものはないということである。」「元の親が現れて伝えるおみちの教えは、親の言う事に間違いは無いのであり、信じて疑わないように、素直に心に治める事が大切なのである」。大要以上のような説明がなされた。

さらに天理教の教えについて次のような確認がなされた。「おみちの教えというのは、要するに親神様がこの世の表にお現れ下さって、親ならばこそご存知の人間世界の『もと』を明かして下さいって世界の人々の心のよりどころとなるようにお教え下さったものである。『もと』とは、一つには人間には『元の親』がおいでになるということである。人間の『親』である親神様から教えてもらわなければ、見えないことがある。確かに学問や科学という道もあるが、それを通じてのみでは、まだ分かり得ない事がたくさんある。例えば人間というのは、何のために生命を受けたかという事については現代科学の粋を集めても答えは出てこない。しかし、親の口から一口『互い立て合いの陽気ぐらしの生活を送らせるために人間を始めたんだ』とおっしゃっていただいたのが、このおみちの教えである。」「したがって世界はいちれつ兄弟であるといわれるのは、皆仲良くした方が良くというような観念的な兄弟論でなく、人間は親神様の子どもであり、そのご守護の中でおつくりいただいた、親を一つにする『真実の兄弟論』だということである。それぞれの身体の中に神のご守護がある。言葉を換えると、ご守護によって生かされているのであり、これは『身上かしの・かりもの』の理と呼ばれる。」

授業は、表面的には、あたかも社会科や国語の授業のように見え、机間巡視や定期考査との関連を示すことなどを通して、生徒への関心を喚起したり、あるいは暗唱の指示が出されたりした。つまり扱われている内容が「天理教の教義」であるということ以外には、取り立てて他教科と異なるようにも思えなかった。

しかし実際には、その教育内容が天理教の教えに深く関わるものであるために、生徒の内面に影響を与えていることは十分に予想される。

表7～12は、生徒の「教義」の時間との関わり方を示したものである。用木コースの生徒を中心にこの時間を意義あるものとして捉えているようである。教義の時間は「自分にとって大切な時間である」と考える生徒は、コースや学年による差異は見られるもののほぼ6割を越えていることが分かる。また「すぐれた用木になるためにも教義を学べるのは嬉しい」という感想は、用木コースの3年生には特に多く抱かれている。

A教諭は授業のところどころで『『いちれつ兄弟』というけれども、おやさまの『ひながた』を見ると反省することが多い』とか「自分だけが楽しくてもそれは真の陽気ぐらしではないと知ってはいても、自分が喜ぶだけで満足して、反省することが僕もある」という意味のコメントを交えるが、表9に示されるように、生徒の方でも約半数が「授業中に自分の信仰について振り返ることがある」ようである。またそうした教師の姿勢は、天理教の教義を「知識」として教えるという点では「教師－生徒」の関係であっても、特に信仰や宗教に基づく実践の段階では、親神や教祖との関係において、共に「兄弟姉妹」として「一れつに」並んでいるとみなすことが出来る。一つの価値基準がありながらも、教師が絶対的な価値の体現者として生徒と「向き合う」のではなく、教師もまた「反省する」存在として、共に「並んで」いる<sup>30)</sup>点は注目し得る。

天理教と他の精神運動との関係は、この授業で偶然触れられた点であるが、教諭は「石門心学」に対してやや否定的な立場を取った。それは、「宗派立学校では自己の信仰する宗教のみを真の宗教として、宗教現象を広く学ぶ機会を奪っている」<sup>30)</sup>とする批判と重なっている。しかし、生徒の受け止め方がいかなるものであるかについては、判断を留保しておくべきであろう。それは次のような生徒作文に見られる。「…その偶然を親神様（天理教で言うところの神様ね）が起こして下さったのかなあって勝手に思い込んで、その時から神様はいるんだって思ってる。まっ、神様ってゆーのは、日頃から我々のそばにいてくれて、我々が気づかないところで、たくさん助けられているんだと思う。だから、こんなに安心して暮らせるんじゃないかなあ。英里んとして、特別何か信仰してたっけ？ そういえば、お母さんが倫理の早起き会に行っていて、よく連れていかれるとか言ってたなあ。寒いからいいやとか言ってたけど、そういわずに行ってみたら？ 何か大事なことが見つかるかもしれない

いよ」<sup>35)</sup>。ここには、この生徒が自己の信仰を大切にす  
る傍らで、単に自己の信仰のみならず広く「宗教的情操」  
の意味を自己の信仰を通じて認識した様子が示されてい  
る。

次に、その他の3年生の『教祖傳』の授業及び1年生  
の『おてふり』の実習について触れておきたい。

教祖伝を学ぶことは、単なる伝記を知る以上に自己の  
信仰姿勢を振り返る動機づけという意味を合わせ持つこ  
とは既に述べたとおりであるが、3年生の『教祖傳』の  
授業においてもその可能性が多く見られた。特にI類の  
3年生の多くが、「教義」の時間に聞く話が「とても役  
立つ」と答えている(表7)ことは注目し値しよう。

授業では、冒頭3年生が卒業時に拝戴する「おさづけ」  
について触れられた。おさづけは、「月日のやしろ」と  
しての教祖からさづかるものであり、その立場を明らか  
にするために教祖が「断食」をした逸話を紹介した。そ  
の陰には「他人の身上をたすけるには、わが身も同じ苦  
しみを味わおうとされる教祖の意志と、教祖の体内にあ  
る神の力を示そうというお心があった」ことが説明され  
た。3年生は、毎月1度計9回の「別席」を運ぶ。それ  
が「おさづけ」を拝戴する前提であるが、そこでは親神  
についての話を聞く<sup>36)</sup>ことになる。教諭からは「大事な  
のは自分の手足を汚してでも人に喜んでいただく、小さ  
なことでも人に喜んでいただく姿勢」「どういう立場に  
つくにしても“おば”で学んだ心、人に喜んでいただく  
ということを忘れないようにしてほしい」「商売する際  
にも、高うこうて安う売ってくれという教祖の教えがあ  
る。人を助ける心にはいろいろな形があるので、その心  
を忘れないように」といった説明がなされた。授業の終  
末では、「別席の順序を運んだ人は、願えば誰でも『お  
さづけの理』を戴けるが、中にはせっかく『おさづけの  
理』を戴いても、それを取り次ぐこともしないで、やが  
てはそれを落としてしまう人もいるかもしれない。しか  
し、教祖のお心は願ってきたその人の真実の心に『お  
さづけの理』を授ける親心であり、誰にはやろう、誰には  
やらんとはおおせにならない」こと、「最も大切なのは、  
おさづけを戴いた後であり、おさづけの理を身近な人か  
ら使わせていただいて、人に助かっていただくことを願  
う心を自分の中につちかうことが大切である」ことが話  
された。

この「おさづけ」についての生徒の感想は表22に見ら  
れる通りであるが、繰り返し学ぶことをはじめ、特に用  
木コースの生徒にはその拝戴を期待している様子が見て  
とれる。

最後に、1年生の「おてふり」の実習であるが、それ

は鳴り物等も揃えた畳敷の「おてふり教室」で行われる。  
教師も生徒も天理教のハッピーを身につけ、扇を持参して  
教師の指示に従って実習を受ける。全員で地歌を唱和し  
ながら、扇の動かし方、足の動かし方を学んでいく。か  
ぐらの地歌自体についての説明もなされるが、「ここで  
扇を倒すのは、教祖の失望を表している」「ここで扇を  
重ねるのは、相互い立て合い、助け合いということを示  
している」などという最低限の説明がなされるのみであ  
った。この実習には、それまでの経験が如実に反映する。  
教会の子弟としてこの「おてふり」になじんできた子ど  
もにとっては「真剣に学ばなくても必ず出来る」もので  
あるし、寮生にとっては「毎日のおつとめでなれている  
もの」であるため、生徒の「習熟度」の差が如実に現わ  
れる。天理教により親しんできた生徒が多い用木コース  
の生徒は、高校から「おちば」の学校に入学しても、天  
理中学からの進学者に比べて、「おてふりや天理教の教  
義の理解の面で遅れていると感じる」ことが少ないこと  
を示す表21の結果からも、そのことは容易に推察される。

## (2) 礼拝について

天理高校では、毎朝7時50分から本部神殿への参拝を  
行う。天理中学校、天理小学校、天理教校附属校などの  
生徒が同時に参拝を行い、神楽の地歌を拍子木に合わせて  
唱和しながら「ておどり」を行うが、本部中央の“お  
ば”を示すかんろだいに向かって東西南北の四方から祈  
りが捧げられる雰囲気は荘厳である。

実際には、表6からも明らかなように全生徒がそれに  
集中しているとは言えない。しかし、8割の生徒が参拝  
自体を肯定的に受け止めていることも示されている。学  
年が上がるにつれて参拝時のざわめきが減少することを  
「少しずつ神の働きを知りつつあるという印象がある」  
という教師もいる<sup>37)</sup>が、確かに、「毎朝喜んで参拝して  
いる」生徒が、I類を中心に特に3年生に多く見られる。  
この他にも、友達と誘いあって参拝したり、自分のこと  
のみならず他人のことについても祈るということを次第  
に身につけてゆくという。

参拝時にどんなことを考えているかを記す自由記述欄  
には「特別なことがない限りは、『今日も一日元気な体  
でおつれ通りください』とか『何不自由なく暮らさせて  
頂いてありがとうございます』とかお礼します」、  
「自分や地元の家族が健康にいさせてもらいありがとうございます  
というようなこと」といった記述が多く見られる。  
中には「ねむい」「うとうとうしい」という感想もあるが、  
「毎朝の参拝は自分をかえりみることのできる時間だ  
と思う」という感想に代表されるように、確かに毎朝の参

拝は、自己省察の機会となっているようである。

天理教の信者の感想は分からないとしても、生徒とともに参拝した二度の経験においては、先に述べた「心の成人」を目指しての精進を動機づけられるのではないか、という印象を得た。それは、四方から正に「いちれつ兄弟」として、未完成の「かんろだい」に向かう時に、まずその「いちれつ兄弟」として皆とおつとめをしている現実を「陽気ぐらし」の一つの縮小モデルとして感じることに、次いで、もう一つにはその縮小モデルを広げたり、払い切れていない自己の「ほこり」をはらって「完成されたかんろだい」の実現を目指すそうとする意志が働くように思われた。わずか二度の参拝を通じての印象であるため正確とは言えないが、そうしたことは「神殿は、おつとめをしながら自分の内面を見つめることの出来る、素晴らしい場所だと思います。今日はこんな心違いをってしまったと反省し、親神様におわび申し上げることの出来る聖なる場所でもあると思います。だから私は参拝をめんどくさいとか、しんどいかいというには思いません。」<sup>39)</sup>という生徒作文からも感じられる。

なお、この朝の参拝については出席の義務がある。天理高校の場合は、毎朝神殿前に集合して点呼をとるが、欠席については、1回につき「教義」の定期考査の点数より2点ずつが減せられることになっている。このことは、「参拝は良いことだと思うけれど、今は形の上だけの参拝になりつつあるので、そんなことだったらしない方がましだと思う」という生徒の感想とも関わっているように思われるが、詳細な検討は、別の機会に譲りたい。

### (3) 宗教以外の学校生活について

天理高校では、宗教の「教義」の時間以外にも本部行事への積極的な「ひのきしん」を促している。例えば、1月の「お節会」には全校生徒が3日間にわたって「ひのきしん」に参加する。また8月の「子どもおちばがえり」にはその「お世話どり」に、約半数の生徒が参加する。前者はお供え餅のお下がり料理するものであり、後者は全国の信徒の子弟が、“おちば”である天理の地を訪れるというものである。さらに、先の「学校案内」で見たように、毎週日曜日に有志は「早朝ひのきしん」にも参加している。

これらの行事を通じて生徒は、実体験の中で信仰を深めてゆくという。例えば、「子どもおちばがえり」のお世話どりで、子どもに「いくらもらってんの」と尋ねられた高校生もいたそうである。当然無償奉仕であることを、「ただでやってんだよ」と答えながら、その生徒は人に尽くす喜びや物をもらうこと以外の喜びを感じたよ

うだったともいう。「厳しい暑さの中、大勢の子どもの前でゲームをしたり踊ったりというようなことを毎日一生懸命やっていたのは、子どもたちに喜んでもらいたい。楽しんでもらいたい一心からでした。その楽しそうな顔が嬉しくて、恥ずかしいと思う暇もなく頑張れたのです。疲れてしんどいなあと思っている時でも、そういう顔を見ると気持ちが優しく、明るくなるような気がしました」<sup>39)</sup>という生徒の感想はそのことをよく表している。

また『天理高校に入学したら、絶対おちば帰りひのきしんをやるんだ。』と、中学生の頃からずっと子どもおちば帰りのひのきしんに憧れていた<sup>40)</sup>とも記されているように、この「子どもおちばがえり」に天理高校入学の動機となった生徒も多い。表4に見られるようにⅢ類を除く各コースの生徒は7割以上が、少なくとも1回は「おちばがえり」の経験を持っている。

最後に学校自体の持つ宗教的雰囲気について一つのエピソードを紹介したい。土曜日の午後、クラブ活動に取り組んでいた女生徒が、仲間の投げた円盤投げの円盤を首にぶつけていた。友人につき添われて歩いているのを見たA教諭は、彼女をそばへ座らせておもむろに「おさづけ」を始めた。教諭が一心におさづけを繰り返すそばで、つき添っていた友人たちも祈りを捧げ始め、また遠くを歩いていた女生徒たちも、その様子に気づくと立ち止まって祈り始めたが、それらは全て自然な流れの中で起こったことであった。

教諭の「おさづけ」後、女生徒は泣きやみ再びつき添われて歩き始めたが、「痛み」は明らかに減じているようであった。ここに天理王命の働き、ご守護があったのかどうか、信者でない私は判断を留保せざるを得ないが、教師も生徒も痛みを訴えている生徒のことを一心に考えていたことは確かだ、それを感じた生徒にとっては、痛みが和らぐような感を得たと考えることも出来よう。

同様のことを、生徒指導についても言うことが出来る。試験の成績も含めて、全く問題のない学校というのは皆無だが、「節から芽が出る、難儀不自由は信仰の花」といわれるように「難儀不自由を難儀と受け止めず、成人のチャンスとうけとめる」のが天理高校の基本姿勢である。こうしたプラス思考を前提に据えて、教会に預けることなど、学校・親・生徒の三者一体の努力で克服することが目指されるとのことであった。教師自身が生徒と共に神殿を訪れ、教師は教師として不幸な状況になっている生徒の苦しみを申し訳なく思いながら祈りを捧げるというのである。

こうした校内の雰囲気は、少なくとも「何で自分のために祈ってくれるのか」「自分のことを皆が思ってくれ

ている」という思いを生徒の中に喚起すると思われる。それが「皆人がいい人たちで明るくて素直」という感想につながるものと思われる。

#### 4. 生徒の意識・評価

天理大学の飯田照明は天理高校の生徒が抱えると思われる問題について「全生徒がいつも熱心に信仰を求めるとは限らない。成長期の大きな振幅の中で自我の主張や社会性の未熟から、さまざまな徴候を示すものや、受験のための勉強に追われ、それにエネルギーを集中するあまり、他のことには関心を示さない生徒も中には見られる。論理的で合理的な物の見方や考え方をさらに学び身につけてゆこうとする丁度その時期に、それと並行して論理性や合理性を時には超えた神秘性を持つ宗教の教えを矛盾なく両立させて教えることは決して容易なことではない。生徒がほかの教科で学ぶ物の見方や考え方と教義の時間で学ぶものとの違いに困惑したり混乱するのもまた無理からぬことであると言える。(略) 人生のあらゆることを一通り体験した人が納得でき理解できる深い信仰の喜びを、これからという若い生徒に分からせ関心を持たせることは決して容易なことではない。また、生徒が生まれ育った家庭の宗教的環境の違いからくる生徒一人一人の信仰心の個人差は大きく、その違いをうめることも大変難しい」と述べている<sup>40)</sup>。

それは、天理高校の生徒514名に対するアンケートの中にはっきりと見てとることができる。

まず、天理高校への出願はその多くが「自分自身」によって決定され、「第1志望」の学校であったことがわかる(表2)。その動機が多岐にわたることは既に見た通り(表3)であるが、現在は、約8割の生徒が天理高校への入学を「よかった」と評価している(表1)。特に3年生には「失敗だった」という評価を下す生徒が162名中8名のみである。

このことは、生徒の多くが、既に見たように「こどもおちばがえり」などを通じてこれまでも天理教と積極的な関わりを持っていたことと関係しているように思われる。表5に示される通り、生活の中で何に力を入れるかについては志望動機に応じて様々であるが、参拝については、表6に示される通り、おおむね抵抗なく取り組んでいる様子を見ることができる。

飯田の指摘する「困惑」や「混乱」は、「自分には理解できない」内容についての自由記述欄に多く記されている。「学校で歴史や理科を学んでいながら無理なことを言うのが分からない」「人間の創始のこと」「何でも

かんでも親神様に結びつけること」「他宗教が批判されること」「貧におちきると言いながら大きな神殿を立てていること」「人が死ななかつたと教えられたとき」などの記述がそこには見られる。

ただし、6割以上の生徒が「自分の身体は親神様からのかりものだ」と思っており、(表13)、また7割以上の生徒が「身上(病気)を通して心の使い方を反省しようと思う」と答えている(表14)ことも踏まえておく必要がある。また「自分は、今よりもっと一生懸命に天理教を信仰しよう」と思う生徒は、Ⅲ類でも約4割、用木コースに至っては、8割を越えている。しかも用木コースの場合、(サンプル数の制約はあるものの)学年とともに「とてもそう思う」と回答した生徒が増えていることにも注目しておきたい。

次に天理高校への入学を「失敗した」と判断した生徒について検討する。他の多くの学校で見られる通り、この判断と「志望順位」の間には相関関係がある。志望動機の自由記述欄に「公立校に落ちたから、親父がうるさかったから」「こしかなかった」と記して「失敗だった」と判断した生徒と、「物心ついた時から自分は天理高校と決めていたから」「自制心を養うため」と記して「よかった」と感じている生徒との間には、評価にずれが生じることは想像に難くない。

また「失敗した」とする生徒の判断と「参拝」や「教義の時間」などの宗教教育との間にも相関関係が見られる(表6～15)。こうした生徒は、様々な面で無気力感にさいなまれており(表5)、宗教教育が「失敗した」と判断する大きな要因になっているかどうかは定かではない。今回の調査の持つ限界から、現在「失敗した」と判断する生徒が学年が上がるにつれて、「よかった」と感じるようになるのかについては十分な予想が立てられないが、3年生に「失敗した」と判断する生徒がなぜ少ないのかというその原因をより丁寧に検討することで、そのための示唆が得られるものと思われる。

中には、次のような作文がある。「天理教を止めようと思ったことさえ幾度となくある」生徒の作文である。「しかし、私は天理教を捨てることは出来なかった。きっとこれからも出来ないだろう。それは何故か。それは私の内なる部分に、天理教が深く関わっているからである。私にとって天理教とは、私の外側にあるものではなく内側にあるものなのだ。私が私であるためには、天理教が不可欠なのである」。また、「毎朝の参拝がイヤでイヤでたまりませんでした。しかし、天理高校は天理教の教えに基づく学校です。まさか『参拝を廃止しましょう』と提案するわけにもいきません。だからイヤイヤながらも

毎朝の参拝を続けていました」という生徒が、「入学当時、あれだけイヤがっていた自分が信じられないくらいです。少し前までは拝礼の時など何気なく下を向いているだけでしたが、いまはちゃんと頭の中で、一日のお礼を言わせて頂いています。そしてこのおつとめを毎日続けることに意義があると思います」と記してもいる<sup>42)</sup>。

以上、天理高校で行われている天理教の教義に基づいた宗教教育がいくつかの問題点を有しながらも、生徒にはおおむね肯定的に受け止められていることを概観した。それでは、それは単に天理教の教義のみに限られたものであろうか。次にその点を検討したい。

## 5. まとめ～「宗教的情操」の教育への示唆～

天理高校の宗教教育が天理教に根ざしたものであることは、何度も確認した通りである。しかし、アンケートの自由記述欄に次のように記す生徒もいる。「教義の時間は天理教の知識だけでなく自分自身を広げられる時間です」「天高の教義は天理教を学ぶと言うより、人間として生きていく上で大切なことを学んでいると思う」「参拝は心がおちつく。天理教の歴史はおもしろくないが、教理は社会生活していく上で大切なことが多く約に立つ」。また「よいこと（常識？）を教えていると思う。あまり深入りするのにも限度があると思う」という感想も記されている。

こうした感想は、天理高校での宗教教育を全く誤解した的はずれな感想であろうか。これまで、天理教の人間観と、それに基づいた宗教教育の実践例を見る上で、こうした感想につながる要因はないだろうか。天理教と同時期に成立した民衆宗教である金光教に触れた拙稿の中では、「自然の偉大な恵みの一切の源泉であると同時に、人間や共同体の運命の一切を左右し、人々を救いに導いていくはずの存在」としての「人格神」が想定されていること、その「根源的生命」の思想をもとに、生活倫理としての「心なおし」の教えが柱の一つになっていると考察されていることを紹介した。そしてその神が、シンボルとして「言語記号だけによっては伝達が困難な超越的な意味の世界」を想起させるものであり、それが「善さ」を原理とする道德教育とつながり得るものであることを検討した。

天理教と金光教は、この「人格神」や「根源的生命」の思想を共有しているのものであると考えられており、両者を比較した研究ではその親近性を指摘するものが多い。したがってこうした点は天理高校の宗教教育の内容についても当てはまると言えよう。

そして、そのシンボル性は、先に触れた「きりなしふしん」の「もうこれでよいというところがない」という特徴、つまり現状維持よりも常に成長への意欲を喚起するという教えと、未完成の「かんろだい」という未だに発達途上にあることを示すシンボルとによって明確に示されている。

例えば、ヒト・レニン研究で著名な筑波大学の村上和夫教授は、天理教会の子弟だが、その著書で次のように述べている。「私どものレニン研究は、世に問えるものとなった。そして、筑波大学創立十周年に、大きな花を添えることが出来た。だが、私は気をゆるめなかった。これを飛躍台にして、更なる成果を目指して、再び三千日を設定した。研究も『きりなしふしん』なのである」<sup>43)</sup>。ここには、日常生活の働きにおいて常に成長を目指す姿勢を見いだすことができる。

しかし、それ以上にこの「きりなしふしん」の姿勢は、例えばリベラリズムの議論において求められる「可謬性の自覚」とも重なるように思われる。井上達夫は、これを「異質な価値観を抱く他者との間で、相互理解の困難さ故に緊張をはらんだ対話を粘り強く営むことを通じて、自己の思想の地平を絶えず広げてゆこうと努める人々の、永続的な探究の情熱から生まれる自己批判的な謙仰」<sup>44)</sup>、あるいは『「群盲性」への合意、即ち我々の存在接触の有限性と相補性の相互承認」「存在の豊饒性への共同帰依としての合意」<sup>45)</sup>と表現しているが、「きりなしふしん」とこの姿勢とは非常に似通っている。

さらにこうした精神性について次のように説明づけることも出来る<sup>46)</sup>。「様々な個別的欲求・志向の対象として指定されたものは『欲求されたもの』たる限りで何らか『善きもの』という性格を有する。が、その同じものは、それ自身が端的に『善きもの・善そのもの』であるかのごとくに執着されるなら、いわば超越的な善との関わりから切り離されてしまい、何らか『閉じられたもの』『悪しきもの』となってしまうのである。(略)否定されるべきは、むろん諸々の善きものの方ではなく、自ら指定したそのものに執着し、またそのことをしも自ら肯定する自己の方である」。この「自らの恣意的な欲求・志向をその都度、限りなく超越する善性の働きに対して自己の全体を開いてゆくこと」に「信」という言葉をあて、それを、意味あるものと捉えている。

これら、二つの相反するかに思われる記述で示されたのと同じ精神性が「きりなしふしん」の哲学には込められている。何度も繰り返す通り、天理高校の宗教教育は天理教の教義に根ざしたものであり、天理教の親神（天理王命）の存在を規定しなければ生まれなかったもので

ある。しかし、その中にはここで見たように倫理教育の内容を豊かにし得るような契機が数多く含まれている。「はじめに」で述べたように、生徒の意識を踏まえた事例研究を重ねることで、新しい倫理教育の可能性を探究する作業を続けたい。

### 【注】

- 1) 拙稿『『宗教的情操』の教育に関する一考察』(東京大学教育行政学研究室紀要 第13号 1993年)
- 2) 『平成5年度版 天理高等学校学校案内』
- 3) 用木コースの指導理念等については、上記『学校案内』のほか「用木コース活動計画書」(学校内部資料)を参照させていただいた。
- 4) 天理高等学校教養科発行「続いてこそ道」(信条教育叢書40号) p.5
- 5) 天理高等学校教養科発行「天理から友へ」(信条教育叢書37号) p.30
- 6) 飯田照明「宗教教育の実践例－天理教」(『宗教教育の理論と実際』 日本宗教学会「宗教と教育に関する委員会」編 すずき出版 1985)
- 7) 『天理学寮北寮入寮案内』
- 8) 『天理学寮東寮 生活の心得』
- 9) 中島秀夫 『総説 天理教学』(天理やまと文化会議 1992)  
以下、本文中のページ数は本書の該当ページを指す。
- 10) 松本滋 『天理教の信仰と思想Ⅲ 陽気ぐらしへの道』(天理教友社 1983) p.62
- 11) 松本滋 前掲書 pp.35-36
- 12) ロバート・キサラ『現代宗教と社会倫理』(青弓社 1992) pp.33-52
- 13) 村上重良 「中山みきと天理教」(『日本思想大系 民衆宗教の思想』 岩波書店 1971) p.614
- 14) 村上重良 同上書
- 15) 松本滋 前掲書 pp.103-104
- 16) 松本滋 前掲書 p.107
- 17) 松本滋 前掲書 p.38
- 18) 小野清一 『ひのきしんとたんのう』(天理教道友社 1975) p.28
- 19) この低い心については、教祖とその末女こかんとの間会話として「世界には枕元に食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと言うて苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある」という教祖の言葉が伝えられており、その例とされている。
- 20) 松本滋 前掲書 pp.108-109
- 21) 田中喜久男「ほこりといんねん」(天理教道友社 1976) p.19
- 22) 同上書 pp.40-41
- 23) 中島秀夫 前掲書 p.316
- 24) 御多忙の中お時間を頂戴して飯田先生より直々に伺いました。
- 25) 「一れつ曾生卒業予定者に対するお話」(真柱訓話集26巻)
- 26) 松本滋 前掲書 p.147
- 27) 小野清一 前掲書 p.4
- 28) ユングが『ヨブへの答え』で考察した点と、中島が「宮池事件における信仰的悟りとは」で触れている、教祖の「神」と「人間性」との関係は実に似通っている。
- 29) ロバート・キサラ 前掲書 pp.40-41
- 30) 村上重良 前掲 p.608  
※その他ここでの考察には下記の参考文献を使用した。
- 永尾広海 『つとめとさづけ』(天理教道友社 1976)
- 中山慶一 『かしもの・かりもの』(天理教道友社 1975)
- 小野清一 『ひのきしんとたんのう』(天理教道友社 1975)
- 平野知一 『親里おぢば』(天理教道友社 1975)
- 上田嘉成 『元初まりの話』(天理教道友社 1974)
- 31) 授業で触れられたのは次の箇所である。  
しやんせよ なんぼすんだる 水やとて とろを  
いれたら にごる事なり  
にごり水 はやくすまさん 事にてわ しんのは  
しらの いれよふがない  
はしらさい はやくいれたる 事ならば まつた  
いしかと をさまりがつく  
このよふを はじめた神の しんぢつを といて  
きかする うそをもうな
- 32) 同様に、次の箇所にも触れられた。  
いま、でも しんがくこふき あるけれど もと  
をしりたる ものハないぞや  
そのはづや どころみなかの みちすがら しり  
たるものハ ないはづの事  
これまでハ このよはじめて ない事を たんた  
んといて きかす事なり

なにもかも ない事はかり とくけれど これに  
まちごた 事ハないぞや

- 33) 米国における道徳教育の方法論の一つに「価値の明確化」があるが、そこでは教師もまた、生徒と共に討論に参加している。既に天理教の教義に基づく価値基準がある天理高校の場合と、一旦は全く価値を相対化するという方法とは、その点で異なっているが、教師－生徒関係においては共通点があるように思われる。
- 34) 吉澤昇「宗教教育」(『新教育学事典』 第一法規 1990)
- 35) 天理高校教義科発行『信条教育叢書37 天理から友へ』
- 36) 9度の「別席」ではすべて同じ話がなされる。このことについて生徒は次のように記している。「別席というのは、九回神様の話を聞かしてもらうんだけど、九回運んだら、おさづけの理とって、人に助かって頂くための方法みたいなのを授けて頂けるんだよ。九回の話の内容は、この間見てもらった天理教教典や、おやさまの話などだけど、九回とも同じ話なんだよ。それだけしっかりと心の中に治まるようにということからなんだ。」(同上『天理から友へ』より)
- 37) 天理高校訪問時に教義科の先生方と懇談の場を持っていただき、お話を伺った。
- 38) 天理高校教義科発行『信条教育叢書39 参拝に心を込めて』
- 39) 天理高校教義科発行『信条教育叢書36 自分を活かす－人々ののしあわせのために－』
- 40) 同 上
- 41) 飯田照明「宗教教育の実際例－天理教」(『宗教教育の理論と実際』 前掲)  
pp.362-363
- 42) 天理高校教義科発行『信条教育叢書37 天理から友へ』
- 43) 村上和雄『人間 信仰 科学』(天理教道友社 1986)  
p.119
- 44) 井上達夫『共生の作法』(創文社 1986) p.202
- 45) 井上達夫「合意を疑う」(合意形成研究会『カオス時代の合意学』創文社 1994) p.61
- 46) 谷 隆一郎「自己と超越」(『日本倫理学会論集28 信と知』慶應通信 1993) pp.52-53

本研究に際しては、天理高校の吉川校長はじめ教義科の諸先生並びに生徒の皆さんに多大なお力添えをいただきました。厚く御礼申し上げます。

<サンプル・デザイン>

	I 類教養コース	I 類用木コース	II 類	III 類	合計
1 年	70	45	36	18	169
2 年	62	44	59	18	183
3 年	62	44	35	21	162
計	194	133	130	57	514

表1 生徒による学校評価「天理高校に入学したことを現在どう思っていますか」

( )は、各コース/各学年の生徒全体に対する割合

		I 類教養コース	I 類用木コース	II 類	III 類	合計
よかったと思っている	1年	11 (15.7)	11 (24.4)	12 (33.3)	5 (27.8)	39 (23.1)
	2年	10 (16.1)	13 (29.5)	13 (22.0)	8 (44.4)	44 (24.0)
	3年	30 (48.3)	24 (54.5)	14 (31.8)	10 (47.6)	78 (48.1)
	計	51 (26.2)	48 (36.1)	39 (30.0)	23 (40.4)	161 (31.3)
期待はずれのところもあるが よかったと思っている	1年	39 (55.7)	24 (53.3)	17 (47.2)	11 (61.1)	91 (53.8)
	2年	33 (53.2)	26 (59.1)	32 (54.2)	6 (33.3)	97 (53.0)
	3年	27 (43.5)	18 (40.9)	13 (37.1)	8 (38.1)	66 (22.2)
	計	99 (51.0)	68 (51.1)	62 (47.7)	25 (43.9)	254 (49.4)
期待はずれのところが 多く、「失敗だった」 と思っている	1年	12 (17.1)	4 ( 8.9)	5 (13.9)	2 (11.1)	23 (13.6)
	2年	13 (21.0)	3 ( 6.8)	11 (18.6)	4 (22.2)	31 (16.9)
	3年	1 ( 1.6)	1 ( 2.3)	5 (14.3)	1 ( 4.8)	8 ( 4.9)
	計	26 (13.4)	8 ( 6.0)	21 (16.1)	7 (12.3)	62 (12.1)
わからない	計	18 ( 9.3)	9 ( 6.8)	8 ( 6.2)	2 ( 3.5)	37 (7.2)
全 体		194	133	130	57	514

表2-1 コースの違い・学校への評価と「志望順位」の関係

( )は、各コースの生徒全体に対する割合

	第1志望	第2志望	第3志望	第4志望他	合計
I 類教養コース	169 (87.1)	15 ( 7.7)	3 ( 1.5)	7 ( 3.6)	194
I 類用木コース	115 (86.5)	14 (10.5)	3 ( 2.3)	1 ( 0.8)	133
II 類	98 (75.4)	18 (13.8)	7 ( 5.4)	7 ( 5.4)	130
III 類	54 (94.7)	0 ( 0.0)	2 ( 3.5)	1 ( 1.8)	57
全 体	436 (84.8)	47 ( 9.1)	15 ( 2.9)	16 ( 3.1)	514
「失敗だった」	35 (56.4)	13 (21.0)	8 (12.9)	6 ( 9.7)	62



「宗教的情操」の教育に関する一考察(2)

表2-2 コースの違い・学校への評価と「出願の決定者」との関係

( ) は、各コースの生徒全体に対する割合

	自分	父・母	小中学校の教師	教会長	その他	合計
I類教養コース	161 (83.0)	21 (10.8)	0 (0.0)	2 (1.0)	10 (5.2)	194
I類用木コース	106 (79.7)	19 (14.3)	0 (0.0)	1 (0.8)	7 (5.3)	133
II類	104 (80.0)	18 (13.8)	1 (0.8)	0 (0.0)	7 (5.4)	130
III類	53 (93.0)	2 (3.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.5)	57
全体	424 (82.5)	60 (11.7)	1 (0.2)	3 (0.6)	26 (5.1)	514
「失敗だった」	43 (69.4)	13 (21.0)	0 (0.0)	1 (1.6)	5 (8.1)	62

表3 コースの違い・学校への評価と志望動機の関係(全学年合計) : 「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」

( ) は、各コースの生徒全体に対する割合

		I類教養コース	I類用木コース	II類	III類	合計	「失敗だった」
学校の特徴(天理教に基づく教育をおちばで受けられる)のため	とても	31 (16.0)	53 (39.8)	29 (22.3)	6 (10.5)	119 (23.2)	5 (8.0)
	すこし	50 (25.8)	57 (42.8)	41 (31.5)	7 (12.3)	155 (30.2)	14 (22.5)
クラブ活動がさかんだから	とても	60 (30.9)	20 (15.0)	15 (11.3)	51 (89.5)	301 (58.6)	14 (22.5)
	すこし	50 (25.8)	47 (35.3)	27 (20.8)	5 (8.8)	129 (25.1)	15 (24.2)
大学進学に有利だから	とても	12 (6.2)	5 (3.8)	11 (8.5)	20 (35.1)	48 (9.3)	12 (19.4)
	すこし	46 (23.7)	24 (18.4)	33 (25.4)	11 (19.2)	114 (22.2)	10 (16.1)
自分が天理教を信仰してきたから	とても	45 (23.2)	83 (62.4)	41 (31.5)	5 (8.8)	174 (33.9)	7 (11.3)
	すこし	40 (20.6)	38 (28.8)	38 (29.2)	4 (7.0)	120 (23.3)	18 (29.0)
家族が天理教の信者だから	とても	67 (34.5)	82 (61.7)	44 (33.8)	8 (14.0)	201 (39.1)	17 (27.4)
	すこし	40 (20.6)	35 (26.3)	39 (30.0)	6 (10.5)	120 (23.3)	17 (47.4)

表4 コースの違い・学校の評価と天理教との入学前の接触との関係 : 「入学前に経験がない」生徒数

( ) は、各コースの生徒全体に対する割合

	I類教養コース	I類用木コース	II類	III類	合計	「失敗だった」
「こどもおちばがえり」の参加	51 (26.3)	0 (0.0)	23 (17.7)	35 (61.4)	109 (21.2)	13 (21.0)
「朝づとめ」の経験	111 (57.2)	42 (31.6)	65 (50.0)	48 (84.2)	266 (51.8)	38 (61.3)
「夕づとめ」の経験	124 (63.9)	17 (8.8)	74 (38.1)	48 (84.2)	263 (51.2)	40 (64.5)
「ておどり」の経験	99 (51.0)	31 (16.0)	60 (46.2)	42 (73.7)	232 (45.1)	33 (53.2)

表5 コースの違い・学校の評価と現在の力の入れ方の違い（全学年総計）「とても力を入れている」「すこし力を入れている」  
（ ）は、各コースの生徒全体に対する割合

		I類教養コース	I類用木コース	II類	III類	合計	「失敗だった」
授業の予習・復習	とても	3 ( 6.2)	3 ( 2.3)	17 (13.1)	1 ( 1.8)	24 ( 4.6)	3 ( 4.8)
	すこし	51 (26.2)	34 (25.6)	57 (43.8)	4 ( 7.0)	146 (28.4)	14 (22.5)
クラブ活動	とても	87 (44.8)	57 (42.9)	19 (14.6)	52 ( 91.2)	215 (41.8)	9 (14.5)
	すこし	38 (19.6)	36 (27.6)	22 (16.9)	4 ( 7.0)	100 (19.5)	18 (29.0)
学校で決められた時以外の参拝	とても	11 ( 5.7)	28 (21.1)	6 ( 4.6)	5 ( 8.8)	50 (9.7)	0 ( 0.0)
	すこし	53 (27.3)	47 (35.3)	35 (26.9)	21 (36.8)	156 (30.4)	8 (12.9)
早朝ひのきしん	とても	5 ( 2.6)	7 ( 5.3)	1 ( 0.8)	3 ( 5.3)	16 ( 3.1)	0 ( 0.0)
	すこし	8 ( 4.1)	14 (10.5)	5 ( 3.8)	4 ( 7.0)	31 ( 6.0)	1 ( 1.6)
朝づとめ	とても	19 ( 9.8)	20 (15.0)	14 (10.7)	12 (21.1)	65 (12.6)	2 ( 3.2)
	すこし	51 (26.3)	39 (29.3)	51 (39.2)	13 (22.8)	154 (30.0)	14 (22.5)
夕づとめ	とても	8 ( 4.1)	24 (18.0)	15 (11.5)	12 (21.1)	59 (11.5)	1 ( 1.6)
	すこし	35 (18.0)	43 (32.3)	28 (21.5)	12 (21.1)	118 (23.0)	6 ( 9.7)
鳴物の練習	とても	4 ( 2.1)	11 ( 8.3)	14 (10.8)	4 (7.0)	33 ( 6.4)	0 ( 0.0)
	すこし	18 ( 9.3)	46 (34.6)	31 (23.8)	9 (15.8)	7 ( 1.4)	7 (11.3)

「宗教的情操」の教育に関する一考察(2)

表6 コース・学年・学校への評価と毎朝の神殿参拝についての感想との関係  
(Q 毎朝の神殿参拝についてどのように感じていますか)

		I類教養コース	I類用木コース	II類	III類	合計	「失敗だった」
とても大切なこと だと思うので、毎 朝喜んで参拝して いる	1年	13 (18.6)	11 (24.4)	6 (16.6)	5 (27.7)	35 (20.7)	
	2年	9 (14.5)	11 (25.0)	11 (18.6)	7 (38.8)	38 (20.8)	
	3年	16 (25.8)	18 (40.9)	7 (20.0)	2 (9.5)	43 (26.5)	
	計	38 (19.6)	40 (30.1)	24 (18.5)	14 (24.6)	116 (22.5)	4 (6.5)
何となく大切なこ とだという気がす るので	1年	10 (14.3)	16 (35.6)	16 (44.4)	6 (33.4)	48 (28.4)	
	2年	21 (33.9)	18 (40.9)	19 (32.2)	9 (50.0)	67 (36.6)	
	3年	9 (14.5)	19 (43.9)	8 (22.9)	11 (52.3)	47 (29.0)	
	計	40 (20.6)	53 (39.8)	43 (33.1)	26 (45.6)	162 (31.5)	17 (27.4)
学校の決まりなの で、しかたなく 参拝している	1年	9 (12.8)	3 (6.6)	1 (2.8)	1 (5.6)	14 (8.3)	
	2年	11 (17.7)	0 (0.0)	3 (5.1)	0 (0.0)	14 (7.6)	
	3年	10 (16.1)	1 (2.3)	3 (8.6)	3 (14.3)	17 (10.5)	
	計	30 (15.5)	4 (3.0)	7 (5.4)	4 (7.0)	45 (8.6)	10 (16.1)
参拝はいやではな いが朝早いことが つらい	1年	23 (32.9)	11 (24.4)	8 (22.2)	3 (16.7)	45 (26.6)	
	2年	10 (16.1)	11 (25.0)	18 (30.5)	0 (0.0)	39 (21.3)	
	3年	22 (35.5)	2 (4.5)	12 (34.3)	3 (14.3)	39 (24.1)	
	計	55 (28.4)	24 (18.0)	38 (29.2)	6 (10.5)	123 (23.9)	9 (14.5)
できることなら 参拝したくない	1年	8 (11.4)	1 (2.2)	2 (5.5)	0 (0.0)	11 (6.5)	
	2年	9 (14.5)	1 (2.3)	6 (10.2)	0 (0.0)	16 (8.7)	
	3年	3 (4.8)	1 (2.3)	2 (5.7)	1 (4.7)	7 (4.3)	
	計	20 (10.3)	3 (2.3)	10 (7.7)	1 (1.8)	34 (6.6)	21 (33.9)
特に何も感じない	1年	7 (10.0)	3 (6.6)	3 (8.3)	3 (16.7)	16 (9.5)	
	2年	2 (3.2)	3 (6.8)	0 (0.0)	2 (11.1)	7 (3.8)	
	3年	2 (3.2)	3 (6.8)	3 (8.6)	1 (4.8)	9 (5.6)	
	計	11 (5.7)	9 (6.8)	6 (4.6)	6 (10.5)	32 (6.2)	1 (1.6)
無回答など	計	0	0	2	0	2	0
全体		194	133	130	57	514	62

表7 「教義」の時間に聞く話がどの程度役立つと考えるか

類	学年	とても役立つ	まあ役立つ	余り役立つしない	殆ど役立つしない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	11 (15.7)	40 (57.1)	12 (17.1)	7 (10.0)		70
	2年	8 (12.9)	35 (56.5)	12 (19.4)	6 (9.6)	1	62
	3年	26 (41.9)	26 (41.9)	9 (14.5)	1 (1.6)		62
	計	45 (23.1)	101 (52.1)	33 (17.0)	14 (7.2)	1	194
I 類 用 木	1年	7 (15.6)	32 (71.1)	6 (13.3)	0 (0.0)		45
	2年	9 (20.5)	28 (63.6)	6 (13.6)	1 (2.3)		44
	3年	22 (50.0)	21 (47.7)	1 (2.3)	0 (0.0)		44
	計	38 (28.6)	81 (60.9)	13 (9.8)	1 (0.8)		133
II 類	1年	5 (13.9)	25 (69.4)	3 (8.3)	3 (8.3)		36
	2年	15 (25.4)	31 (52.5)	9 (15.3)	4 (6.8)		59
	3年	5 (14.3)	19 (54.3)	9 (25.7)	2 (5.7)		35
	計	25 (19.2)	75 (57.7)	21 (16.2)	9 (6.9)		130
III 類	1年	7 (38.8)	10 (55.6)	1 (5.5)	0 (0.0)		18
	2年	6 (33.3)	10 (55.6)	2 (11.1)	0 (0.0)		18
	3年	3 (14.3)	9 (42.9)	6 (28.6)	3 (14.3)		21
	計	16 (28.1)	29 (50.9)	9 (15.8)	3 (5.7)		57
全体		124 (24.1)	286 (55.6)	76 (14.8)	27 (5.3)	1	514
失敗だった		6 (9.7)	23 (37.1)	17 (27.4)	16 (25.8)		62

表8 「教義」の時間についての感想① 「この時間は自分にとって大切な時間である」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	8 (11.4)	28 (40.0)	25 (35.7)	9 (12.8)		70
	2年	3 (4.8)	25 (40.3)	24 (38.7)	10 (16.1)	1	62
	3年	14 (22.6)	29 (46.8)	16 (25.8)	2 (3.2)		62
	計	25 (12.8)	82 (42.3)	65 (33.5)	21 (10.8)	1	194
I 類 用 木	1年	9 (20.0)	25 (55.6)	9 (20.0)	1 (2.2)		45
	2年	7 (15.9)	22 (50.0)	14 (31.8)	1 (2.3)		44
	3年	18 (40.9)	18 (40.9)	7 (15.9)	1 (2.3)		44
	計	34 (25.6)	65 (48.9)	30 (22.6)	6 (2.3)	1	133
II 類	1年	1 (2.8)	19 (52.8)	14 (38.9)	2 (5.5)		36
	2年	11 (18.6)	32 (54.2)	11 (18.6)	5 (8.5)		59
	3年	4 (11.4)	17 (48.6)	10 (28.6)	4 (11.4)		35
	計	16 (12.3)	68 (52.3)	35 (26.9)	11 (8.4)		130
III 類	1年	6 (33.3)	9 (50.0)	3 (16.7)	0 (0.0)		18
	2年	4 (22.2)	12 (66.6)	2 (11.1)	0 (0.0)		18
	3年	2 (9.5)	6 (28.5)	10 (47.6)	3 (14.3)		21
	計	12 (21.1)	27 (47.4)	15 (26.3)	3 (5.3)		57
全体		87 (16.9)	242 (47.1)	145 (28.2)	38 (7.4)	2	514
失敗だった		3 (4.8)	10 (16.1)	27 (43.5)	22 (35.5)		62

「宗教的情操」の教育に関する一考察(2)

表9 「教義」の時間についての感想② 「授業中に自分の信仰について振り返ることがある」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	7 (10.0)	21 (30.0)	26 (37.1)	16 (22.9)		70
	2年	7 (11.3)	17 (27.4)	26 (37.1)	12 (19.4)		62
	3年	17 (27.4)	19 (30.6)	16 (25.8)	9 (14.5)	1	62
	計	31 (16.0)	57 (29.4)	68 (35.1)	37 (19.1)	1	194
I 類 用 木	1年	12 (26.7)	13 (28.9)	17 (37.8)	3 ( 6.7)		45
	2年	6 (13.6)	19 (43.2)	16 (36.4)	3 ( 6.8)		44
	3年	15 (34.1)	23 (52.3)	5 (11.4)	1 ( 2.3)		44
	計	33 (24.8)	55 (41.6)	38 (28.6)	7 ( 5.3)		133
II 類	1年	3 ( 8.3)	11 (30.6)	15 (41.7)	7 (19.4)		36
	2年	13 (22.0)	22 (37.3)	14 (23.7)	10 (16.9)		59
	3年	4 (11.4)	10 (28.6)	14 (40.0)	7 (20.0)		35
	計	20 (15.4)	43 (33.1)	43 (33.1)	24 (18.5)		130
III 類	1年	4 (22.2)	6 (33.3)	5 (27.8)	3 (16.7)		18
	2年	3 (16.7)	10 (55.6)	4 (22.2)	1 ( 5.6)		18
	3年	1 ( 4.8)	6 (28.6)	8 (38.1)	6 (28.6)		21
	計	8 (14.0)	22 (38.6)	17 (29.8)	10 (17.5)		57
全体	92 (17.9)	177 (34.4)	166 (32.3)	78 (15.1)	1	514	
失敗だった	2 ( 3.2)	11 (17.7)	21 (33.9)	27 (43.5)		62	

表10 「教義」の時間についての感想③ 「すぐれた用木になるためにも教義を学べるのは嬉しい」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	7 (10.0)	16 (22.8)	31 (44.3)	16 (22.9)		70
	2年	2 ( 3.2)	16 (25.8)	30 (48.4)	14 (22.6)		62
	3年	8 (12.9)	21 (33.9)	21 (33.9)	11 (17.7)	1	625
	計	17 ( 8.8)	53 (27.3)	82 (42.3)	41 (21.1)	1	194
I 類 用 木	1年	8 (17.8)	19 (42.2)	18 (40.0)	0 ( 0.0)		45
	2年	4 ( 9.0)	20 (45.4)	19 (43.2)	1 ( 2.3)		44
	3年	15 (34.1)	17 (38.6)	11 (25.0)	1 ( 2.3)		44
	計	27 (20.3)	56 (42.1)	48 (36.1)	2 ( 1.5)		133
II 類	1年	2 ( 5.6)	13 (36.1)	14 (38.9)	7 (19.4)		36
	2年	8 (13.5)	24 (40.7)	16 (27.1)	11 (18.6)		59
	3年	3 ( 8.5)	7 (20.0)	21 (60.0)	4 (11.4)		35
	計	13 (10.0)	44 (33.8)	51 (39.2)	22 (16.9)		130
III 類	1年	2 (11.1)	5 (27.7)	9 (50.0)	2 (11.1)		18
	2年	0 ( 0.0)	8 (44.4)	8 (44.4)	2 (11.1)		18
	3年	0 ( 0.0)	7 (33.3)	11 (52.3)	3 (14.3)		21
	計	2 ( 3.5)	20 (35.1)	28 (49.1)	7 (12.2)		57
全体	59 (11.5)	173 (33.7)	209 (40.7)	72 (14.0)	1	514	
失敗だった	2 ( 3.2)	9 (14.5)	20 (32.3)	30 (48.4)	1	62	

表11 「教義」の時間についての感想④ 「ときどき『自分には理解できない』と思うことがある」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	21 (30.0)	12 (17.1)	29 (41.4)	8 (11.4)		70
	2年	20 (32.3)	12 (19.4)	30 (48.3)	0 (0.0)		62
	3年	10 (16.1)	17 (27.4)	33 (53.2)	1 (1.6)	1	62
	計	51 (26.3)	41 (21.1)	92 (47.4)	9 (46.4)	1	194
I 類 用 木	1年	6 (13.3)	12 (26.7)	22 (48.9)	5 (11.1)		45
	2年	7 (15.9)	12 (27.3)	21 (47.7)	4 (9.1)		44
	3年	4 (9.1)	7 (47.7)	26 (59.1)	7 (47.7)		44
	計	17 (12.8)	31 (23.3)	69 (51.9)	16 (12.0)		133
II 類	1年	5 (13.9)	7 (19.4)	22 (61.1)	2 (5.6)		36
	2年	15 (25.4)	11 (18.6)	29 (49.2)	3 (5.1)	1	59
	3年	7 (20.0)	14 (40.0)	11 (31.4)	3 (8.6)		35
	計	27 (20.8)	32 (24.6)	62 (47.7)	8 (6.2)	1	130
III 類	1年	2 (11.1)	3 (16.6)	9 (50.0)	2 (11.1)	2	18
	2年	5 (27.8)	6 (33.3)	7 (38.9)	0 (0.0)		18
	3年	5 (23.8)	9 (42.9)	6 (28.6)	1 (4.8)		21
	計	12 (21.1)	18 (31.6)	22 (38.6)	3 (5.3)	2	57
全 体	107 (20.8)	122 (23.7)	245 (47.7)	36 (7.0)	4	514	
失 敗 だ っ た	28 (45.1)	12 (19.3)	15 (24.2)	6 (9.7)	1	62	

表12 「教義」の時間についての感想⑤ 「ときどき『教義の時間には出たくない』と思うことがある」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	5 (7.1)	18 (25.7)	34 (48.6)	18 (25.7)		70
	2年	8 (12.9)	7 (11.2)	35 (56.4)	12 (19.4)		62
	3年	0 (0.0)	1 (1.6)	33 (53.2)	26 (41.9)	2	62
	計	13 (6.7)	21 (10.8)	102 (52.6)	56 (28.9)	2	194
I 類 用 木	1年	3 (6.7)	5 (11.1)	22 (48.9)	15 (33.3)		45
	2年	1 (2.3)	3 (6.8)	30 (68.2)	9 (20.5)	1	44
	3年	1 (2.3)	1 (2.3)	14 (31.8)	28 (63.6)		44
	計	5 (3.8)	9 (6.8)	66 (49.6)	52 (39.1)	1	133
II 類	1年	2 (5.6)	1 (2.7)	17 (47.2)	16 (44.4)		36
	2年	6 (10.2)	5 (8.5)	23 (39.0)	25 (42.4)		59
	3年	0 (0.0)	1 (2.9)	20 (57.1)	14 (40.0)		35
	計	8 (6.2)	7 (5.4)	60 (46.2)	55 (42.3)		130
III 類	1年	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (33.3)	12 (66.6)		18
	2年	0 (0.0)	3 (16.6)	13 (72.2)	2 (11.1)		18
	3年	3 (14.2)	3 (14.2)	14 (66.7)	1 (4.8)		21
	計	3 (5.3)	6 (10.5)	33 (57.8)	15 (26.3)		57
全 体	29 (5.6)	43 (8.4)	261 (50.8)	178 (34.6)	3	514	
失 敗 だ っ た	15 (24.2)	9 (14.5)	28 (45.2)	9 (14.5)	1	62	

「宗教的情操」の教育に関する一考察(2)

表13 学校生活の中での感想① 「自分の身体は親神様からのかりものだと思う」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	17 (24.2)	21 (30.0)	18 (25.7)	12 (17.1)	2	70
	2年	15 (24.1)	24 (38.7)	15 (24.2)	8 (12.9)	0	62
	3年	19 (30.6)	19 (30.6)	15 (24.2)	8 (12.9)	1	62
	計	51 (26.3)	64 (33.0)	48 (24.7)	28 (14.4)	3	194
I 類 用 木	1年	19 (42.2)	20 (44.4)	6 (13.3)	0 (0.0)		45
	2年	25 (56.8)	16 (36.3)	2 (4.5)	1 (2.3)		44
	3年	33 (75.0)	9 (20.5)	1 (2.3)	1 (2.3)		44
	計	77 (57.9)	45 (33.8)	9 (6.8)	2 (1.5)		133
II 類	1年	7 (19.4)	15 (41.7)	10 (27.8)	4 (11.1)		36
	2年	20 (33.9)	26 (44.1)	6 (10.2)	7 (11.9)		59
	3年	9 (25.7)	15 (42.9)	6 (17.1)	5 (14.3)		35
	計	36 (27.7)	56 (43.1)	22 (16.9)	16 (12.3)		130
III 類	1年	5 (27.8)	9 (50.0)	2 (11.1)	2 (11.1)		18
	2年	5 (27.8)	6 (33.3)	7 (38.8)	0 (0.0)		18
	3年	2 (9.5)	9 (42.9)	8 (38.1)	2 (9.5)		21
	計	12 (21.1)	24 (42.1)	17 (29.8)	4 (7.0)		57
全 体	176 (34.2)	189 (36.8)	96 (7.0)	50 (9.7)	3	514	
失敗だった	10 (16.1)	15 (24.2)	17 (27.4)	20 (32.3)		62	

表14 学校生活の中での感想② 「身上を通して心の使い方を反省しようと思う」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	16 (22.9)	32 (45.7)	14 (20.0)	7 (10.0)	1	70
	2年	16 (25.8)	26 (41.9)	17 (27.4)	3 (4.8)		62
	3年	23 (37.1)	22 (35.5)	13 (21.0)	4 (6.5)		62
	計	55 (28.4)	80 (41.2)	44 (22.7)	14 (7.2)	1	194
I 類 用 木	1年	19 (42.2)	19 (42.2)	7 (15.5)	0 (0.0)		45
	2年	26 (59.1)	14 (31.8)	2 (4.5)	2 (4.5)		44
	3年	29 (65.9)	12 (27.3)	1 (2.3)	2 (4.5)		44
	計	74 (55.6)	45 (33.8)	10 (7.5)	4 (3.0)		133
II 類	1年	7 (19.4)	20 (55.6)	5 (13.9)	4 (11.1)		36
	2年	24 (40.7)	18 (30.5)	11 (18.6)	6 (10.2)		59
	3年	11 (31.4)	13 (37.1)	8 (22.9)	3 (8.6)		35
	計	42 (32.2)	51 (39.2)	24 (18.5)	13 (10.0)		130
III 類	1年	6 (33.3)	9 (50.0)	3 (16.7)	0 (0.0)		18
	2年	7 (38.8)	6 (33.3)	5 (27.8)	0 (0.0)		18
	3年	3 (14.3)	12 (57.1)	3 (14.3)	3 (14.3)		21
	計	16 (28.1)	27 (47.4)	11 (19.3)	3 (5.3)		57
全 体	187 (36.4)	203 (39.5)	89 (17.3)	34 (6.6)	1	514	
失敗だった	10(16.1)	22 (35.5)	17 (27.4)	13 (21.0)		62	

表15 学校生活の中での感想③ 「自分は今よりもっと一生懸命に天理教を信仰しようと思う」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	9 (12.9)	18 (25.7)	31 (44.3)	10 (14.3)	2	70
	2年	5 (8.1)	21 (33.9)	27 (43.5)	9 (14.5)	0	62
	3年	11 (17.7)	22 (35.5)	19 (30.6)	9 (14.5)	1	62
	計	25 (12.9)	61 (31.4)	77 (39.7)	28 (14.4)	3	194
I 類 用 水	1年	11 (24.4)	23 (51.1)	11 (24.4)	0 (0.0)		45
	2年	12 (27.3)	23 (52.3)	8 (18.8)	1 (2.3)		44
	3年	23 (52.3)	18 (40.9)	2 (4.5)	1 (2.3)		44
	計	46 (34.5)	64 (48.1)	21 (15.7)	2 (1.5)		133
II 類	1年	3 (8.3)	17 (47.2)	10 (27.8)	6 (16.6)		36
	2年	22 (37.9)	18 (30.5)	14 (23.7)	4 (6.8)	1	59
	3年	7 (20.0)	11 (31.4)	14 (40.0)	3 (8.6)		35
	計	32 (24.6)	46 (35.4)	38 (29.2)	13 (10.0)	1	130
III 類	1年	7 (38.9)	3 (16.7)	7 (38.9)	1 (5.6)		18
	2年	3 (16.6)	8 (44.4)	7 (38.8)	0 (0.0)		18
	3年	0 (0.0)	4 (19.0)	13 (61.9)	4 (19.0)		21
	計	10 (17.5)	15 (26.3)	27 (47.4)	5 (8.8)		57
全 体	113 (22.0)	186 (36.2)	163 (31.7)	48 (9.3)	4	514	
失敗 だった	2 (3.2)	17 (27.4)	25 (40.3)	17 (27.4)	1	62	

表16 学校生活の中での感想④ 「朝づとめや夕づとめによって心を澄ませることができる」

		とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I 類 教 養	1年	11 (15.7)	20 (28.6)	26 (37.1)	12 (17.1)	1	70
	2年	7 (11.3)	24 (38.7)	18 (29.0)	13 (21.0)		62
	3年	12 (19.4)	26 (41.9)	20 (32.3)	3 (4.8)	1	62
	計	30 (15.5)	70 (36.1)	64 (33.0)	28 (14.4)	2	194
I 類 用 木	1年	17 (37.8)	19 (42.2)	9 (45.0)	0 (0.0)		45
	2年	13 (29.5)	20 (45.4)	8 (18.2)	3 (6.8)		44
	3年	25 (56.9)	12 (27.2)	5 (11.4)	2 (4.5)		44
	計	55 (41.4)	51 (38.3)	22 (16.5)	5 (3.8)		133
II 類	1年	6 (16.6)	12 (33.3)	15 (41.7)	3 (8.3)		36
	2年	19 (32.2)	27 (45.8)	6 (10.2)	7 (11.9)		59
	3年	6 (17.1)	18 (51.4)	9 (25.7)	2 (5.7)		35
	計	31 (23.8)	57 (43.8)	30 (23.1)	12 (9.2)		130
III 類	1年	5 (27.8)	5 (27.8)	6 (33.3)	2 (11.1)		18
	2年	3 (16.7)	10 (55.6)	5 (27.8)	0 (0.0)		18
	3年	3 (14.2)	7 (33.3)	8 (38.1)	3 (14.3)		21
	計	11 (19.3)	22 (38.6)	19 (33.3)	5 (8.8)		57
全 体	127 (24.7)	200 (38.9)	135 (26.3)	50 (9.7)	2	514	
失敗 だった	2 (3.2)	19 (30.6)	21 (33.9)	20 (32.3)		62	



「宗教的情操」の教育に関する一考察(2)

表17 学校生活の中での感想⑤ 「自分以外の人にも幸せになってもらいたい」

	とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I類・教養	96 (49.5)	85 (43.8)	9 (4.6)	3 (1.5)	1	194
I類・用木	81 (60.9)	45 (33.8)	5 (3.8)	0 (0.0)	2	133
Ⅱ類	54 (41.5)	70 (53.8)	5 (3.8)	1 (0.8)	0	130
Ⅲ類	25 (43.9)	30 (52.6)	2 (3.5)	0 (0.0)	0	57
計	256 (49.8)	230 (44.7)	21 (4.1)	4 (0.8)	3	514
失敗だった	21 (33.9)	33 (53.2)	5 (8.1)	3 (4.8)		62

表18 学校生活の中での感想⑥ 「自分のためよりも社会のために役立ちたい」

	とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I類・教養	43 (22.2)	87 (44.8)	55 (28.4)	7 (3.6)	2	194
I類・用木	41 (30.8)	55 (41.4)	32 (24.1)	3 (2.3)	2	133
Ⅱ類	36 (27.7)	56 (43.1)	34 (26.2)	4 (3.1)	0	130
Ⅲ類	8 (14.0)	30 (52.6)	17 (29.8)	1 (1.8)	1	57
計	128 (24.9)	228 (44.4)	138 (26.8)	15 (2.9)	5	514
失敗だった	10 (16.1)	26 (41.9)	18 (29.0)	7 (11.3)	1	62

表19 高校から「おちばの学校」に入学して① 「天理中学から進学した人とは話しにくい」

	とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I類・教養	4 (3.1)	13 (10.2)	34 (26.6)	74 (57.8)	3	128
I類・用木	1 (0.9)	7 (6.5)	49 (45.8)	48 (44.9)	2	107
Ⅱ類	2 (2.3)	9 (10.5)	25 (29.1)	50 (58.1)	0	86
Ⅲ類	0 (0.0)	1 (1.9)	14 (26.4)	37 (69.8)	1	53
計	7 (1.9)	30 (8.0)	122 (32.6)	209 (55.9)	6	374
失敗だった	1 (2.2)	4 (8.7)	18 (39.1)	23 (50.0)		46

表20 高校から「おちばの学校」に入学して② 「校内の雰囲気になじみにくいと思うことがある」

	とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I類・教養	16 (12.5)	25 (19.5)	45 (35.1)	40 (31.3)	2	128
I類・用木	5 (4.7)	22 (20.6)	48 (44.9)	30 (28.0)	2	107
II類	9 (10.5)	20 (23.3)	30 (34.9)	27 (31.4)		86
III類	3 (5.6)	9 (16.9)	23 (43.4)	17 (32.1)	1	53
計	33 (8.8)	76 (20.3)	146 (39.0)	114 (30.5)	5	374
失敗だった	13 (28.3)	19 (41.3)	11 (23.9)	3 (6.5)		46

表21 高校から「おちばの学校」に入学して③ 「おてふりや天理教の教義の理解などの面で遅れていると感じる」

	とてもそう思う	まあそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	N.A.	計
I類・教養	40 (31.3)	35 (27.3)	28 (21.9)	23 (18.0)	2	128
I類・用木	7 (6.5)	10 (9.3)	36 (33.6)	52 (48.6)	2	107
II類	20 (23.3)	20 (23.3)	21 (24.4)	25 (29.1)		86
III類	6 (11.3)	22 (41.5)	17 (32.1)	7 (13.2)	1	53
計	73 (19.5)	87 (23.3)	102 (27.2)	107 (28.6)	5	374
失敗だった	16 (34.8)	13 (28.3)	9 (19.6)	8 (17.4)		46

表22 別席を運ぶことやおさづけの理を拝戴することについてどのように思いますか：「とてもそう思う」「まあそう思う」

		I類教養コース	I類用木コース	II類	III類	合計	「失敗だった」
別席で聞く話は大切なので繰り返し学びたい	とても	5 (8.1)	17 (38.6)	5 (14.3)	1 (4.8)	28 (17.3)	1 / 8
	まあ	28 (45.2)	19 (43.1)	15 (42.9)	6 (28.6)	68 (42.0)	2 / 8
別席で聞く話のうち、今は分からない所もいつか分かるようになる	とても	13 (21.0)	22 (50.0)	10 (28.6)	4 (19.0)	49 (30.2)	3 / 8
	まあ	30 (48.3)	19 (43.2)	18 (51.4)	9 (42.9)	76 (46.9)	2 / 8
おさづけの理を拝戴するのは楽しみである	とても	22 (35.5)	30 (68.2)	10 (28.6)	5 (23.8)	67 (41.3)	0 / 8
	まあ	15 (24.2)	10 (22.7)	10 (28.6)	5 (23.8)	40 (24.7)	3 / 8
おさづけの理を早く役立てたい	とても	20 (32.3)	29 (65.9)	8 (22.9)	6 (28.6)	63 (38.9)	0 / 8
	まあ	25 (40.3)	13 (29.5)	14 (40.0)	4 (19.0)	56 (34.6)	4 / 8